

ご挨拶

この度は、伊勢崎・多喜二祭実行委員会で、『多喜二奪還事件』の文学的前提』を出版する運びとなりました。私たちが顕彰する「多喜二奪還事件」は、戦前の狂暴な治安維持法下において、不当に検束された多喜二たちナツプ作家を、民衆の力を結集し、交渉を通じて解放させたという画期的な事件であります。それは昭和六年九月六日のことでした。当時私は六歳でありました。私たちの先輩諸氏が「検束」も恐れずに「多喜二奪還」に賭けた想いを、昨年の伊勢崎・多喜二祭で改めて実感致しました。本書が、「多喜二奪還事件」の関心を高める一助になれば幸いです。

二〇〇九年八月一五日

伊勢崎・多喜二祭実行委員会

代表 八田利重



「多喜二奪還事件」資料集

「多喜二奪還事件」の文学的前提

……群馬プロレタリア文学の発見とその展開

解説編…………… 3 ページ

特別編 1…………… 20 ページ

資料編…………… 23 ページ

特別編 2・3…………… 87 ページ

解説編

目次

はじめに……………	本資料集の目的……………	5
1 講演会グループについて……………		5
2 『群馬戦線』と『上毛大衆』の概要……………		8
3 『群馬戦線』と菊池光好……………		9
4 『上毛大衆』同人と「多喜二奪還事件」……………		11
5 『上毛大衆』の散文について……………		12
6 『上毛大衆』の韻文について……………		14
7 『宣戦』掲載の文芸評論をめぐって……………		15
8 『全線』刊行の意義……………		19
まとめにかえて……………	「文芸講演会」開催の諸条件……………	19

はじめに……本資料集の目的

「多喜二奪還事件」^(注1)は、満州事件勃発の直前、一九三二（昭和六）年九月六日から七日に起こった。当時の群馬県佐波郡伊勢崎町の共栄館で予定された「佐波無産青年」主催の「文芸講演会」^(注2)に招かれたナツプ関係の講師陣（小林多喜二、村山知義、中野重治等^(注3)）が地元の主催者達と一緒に検束されたが、民衆の抗議と機転に加え、偶然的な警察官の署からの撤退という事態を前提に、民衆側と警察側の交渉が成立し、検束者の解放が実現したという事件である。

昨年、私たちが発刊した『伊勢崎署占拠・多喜二奪還事件資料集』（以下、『資料集』とする。）において、地元紙の上毛新聞だけでなく、読売・東京朝日・社会運動通信も事件を当時報道していたことを突き止めるとともに、事件当事者の事件の公表や回想が事件より約三十年を経過した一九六〇年以降であることも明らかにした。

本資料集では、事件そのものの解明ではなく、「多喜二奪還事件」を生み出すことになった「文芸講演会」を準備したグループの解明等に主眼を置いた。仮にこの勢力を講演会グループとしておく。多喜二たちナツプ作家を招聘したこの講演会グループは、一九二八（昭和三）年から一九三〇（昭和五）年にかけて、『上毛大衆』『宣戦』^(注4)文芸欄を拠点に、群馬の民衆文学、プロレタリア文学運動を継続的に展開していた『上毛大衆』同人の伊勢崎グループとほぼ重なるのである。つまり、ナツプ作家の「文芸講演会」は、群馬のプロレタリア文学運動の延長線上に位置づけられることになる。今回発見された群馬のプロレタリア文学運動の展開そのものを具体的に知るには、それらの諸作品を実際に確認することが有益であろうと判断して、関連する文芸作品を再録した。本書では、個々の作品の評価については判断を留保し、それは読者諸氏に委ねたい。個々の作品の芸術的価値は、作品としての生命

力に関わるものであるが、総体としての、群馬における民衆文学の展開という視点を抜きには語れないであろう。また、それらの作品は治安維持法下の言論抑圧の中で展開されたものであり、本資料集を作成したのもとしては、文学的営為としての全ての作品に敬意を表するものである。

注1……本事件については、名称そのものが定まっていないうのが現状である。伊勢崎警察署占領事件、伊勢崎署占領事件、伊勢崎署占拠事件、伊勢崎署襲撃事件、小林多喜二奪還事件、文芸講演会弾圧事件等使用されてきた。「多喜二奪還事件」研究は始まったばかりであるが、「襲撃」「占領」「占拠」等は民衆の目的でなかったことが『資料集』において明らかとされた。当資料集においては、文芸講演会弾圧に端を発して起こった事件として、「多喜二奪還事件」を使用する。

注2……朝日新聞一九三二年九月五日付群馬県版記事より

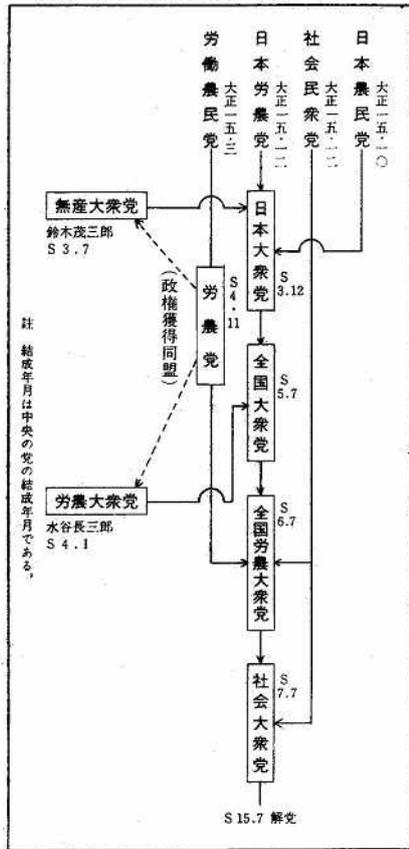
注3……三人の弁士の他に俳優が三、四人参加した。皆の回想では、女優の一人が三好久子である。伊藤信吉の回想では、清洲スミ子の名前もあがっている。今後の検討課題の一つである。俳優が参加していたことについては、村山知義の回想により、左翼劇場が用意されていたということが判明している。

注4……本資料集の『上毛大衆』『宣戦』『群馬戦線』『全線』は群馬県立図書館の原本・複写本及び前橋市立図書館の複写本による。『上毛大衆』『宣戦』は菊池（小林）邦作の寄贈であり、書き込みは本人の直筆である。

1 文芸講演会グループについて

ナツプ作家の招聘については、ナツプ会員であった菊池敏清が『戦旗』の普及数を挙げ、模範的地区であったから葉書一枚の要請で引き受けてくれたと回想している。五十部の定期購読に加え、最高時は百五十部の『戦旗』を

群馬における無産政党の系統図



(『群馬県労働運動史・上 先駆けの人びと』、1974年発行)

配布していたと述べている(注1)。また、配布地域について岡田宝司は「東は太田から西は駒形」と述べている(注2)ので、「戦旗」支局は確立していたとみるべきであろう。仮に当時の佐波郡(現在は玉村町のみ)で他はすべて伊勢崎市)という呼称をとって、佐波「戦旗」支局としておく。とすれば、文芸講演会グループの中には、間違いなく、この佐波「戦旗」支局グループが入るであろう。

菊池(小林)邦作(注3)は、一九六〇年、事件を初めて公表した論文(注4)で「伊勢崎町の社民党支部を中心とする文化団体」が文芸講演会を準備したと述べた。この規定は『群馬県史』や『伊勢崎市史』等にも定着している(注5)。だが、この「社民党」とは当時の無産政党の中でも右派の社会民衆党のことである。非法法の共産党と緊密な関係にあるナツプと関係を持つことはないであろうし、ナツプ側も避けるであろう。その点を考慮したのが、菊池(小林)邦作は一九六七年の『随筆柿』の「伊勢崎署占領事件」の方では、「この地方の革新無産政党を網羅する文化人グループ」と改めている。しかし、「革新無産政党」とは、一体何を意味するのだろうか。この点について、若干の見通しを述べておきたい。

小林邦作は「群馬県青年共産党事件」(注6)で弾圧されるが、労働農民党の結成・拡大に傾注する。しかし、無産政党の分裂の中で無産強戸村の指導者須永好の日本労働党を選択した(注7)。一九二八年秋にはその日本労働党を離れ、社会民衆党に移り、「上毛大衆」の主筆となった。彼の指導の下で組織されていた日本労働党伊勢崎支部は、彼の社会民衆党への移動とともに、支部ぐるみで社会民衆党伊勢崎支部となっている(注8)。

一見すると、小林邦作の辿った道は左派の労働農民党 中間派の日本労働党 右派の社会民衆党と右傾化コースである。しかし、彼の意図していたのは、別のところにあつた(注9)と考えられる。これについては、別途考えてみる必要があるが、ここでは、官憲の妨害と闘いながら、「上毛大衆」の発行過程で急速な左傾化を辿ったと考えておきたい。小林邦作の左傾化は、当然社会民衆党伊勢崎支部と「上毛大衆」の左傾化につながった。その様相は文芸欄からも推測できるので、後述しよう。ともかくも文芸講演会グループの一方として、左傾化した社会民衆党伊勢崎支部(あるいは、社会民衆党左派)、あるいは、左傾化した「上毛大衆」同人の伊勢崎グループを想定できよう。

以上のように、文芸講演会グループの実態は佐波「戦旗」支局グループと「上毛大衆」伊勢崎グループで構成されていたと推定できよう。次に、この「文化団体」と、新聞の広告に出た「佐波無産青年」との関連を考えてみたい。結論的に、この「佐波無産青年」というのは、官憲・権力に対する挑戦、多喜一たちナツプ作家を招聘するという彼等の決意や姿勢を示すものだと考えたい。三・一五や四・一六の弾圧の後、群馬県では一九三〇年十月一日に「無青」弾圧事件が起きていた。日本労働党が他の無産政党諸派と合同し、日本大衆党が生まれたが、さらに全国大衆党が生まれ、それに属する竹部松二郎が中心となり、「無産青年新聞」配布網が左派グループだけでなく、中間派や右派の社会民衆党にまで作られていたのである。「多

喜二奪還事件」でも検束された伊勢崎町（現伊勢崎市）の斎藤力と茂呂村（現伊勢崎市）の菊池盛男が、十ヶ月に及ぶ留置を経て、保釈されたのは、「奪還事件」直前の七月であった。彼等は社会民衆党の伊勢崎支部員であったが、『戦旗』を読み、『無産青年新聞』を普及する社会民衆党員だったのである（注11）。また、この二人への執行猶予付きの有罪判決は八月に出たばかりであった。また、文芸講演会の九月六日は国際無産青年デーであった。ナツプをはじめ、左翼陣営は一大イベントとして、この日を迎えることを呼びかけている。左傾化しているとはいえ、社会民衆党の組織が絡んでいたのでは、公然としたナツプ作家の招聘は難しいだろう。その点、『無産青年新聞』の拡張を推進し、弾圧で二人の犠牲者も出して、「佐波無産青年」と打ち出すことに違和感はなかったに違いない。しかし、県特高側にとってみれば、これは大きな脅威となったであろう。群馬県下一網打尽としたはずの「無産青年」が一年も経たずに復活し、全国に知れ渡った多喜二たちナツプの作家を招聘したのである。つまり、この文芸講演会の開催は、『上毛大衆』伊勢崎グループにとってみれば、左傾化の到着点であったが、言論弾圧等の官憲に対する挑戦であり、侵略戦争に反対する国際的連帯でもあったのである。このように考えれば、菊池（小林）邦作が「革新無産政党」と言った意味も理解できよう。社会民衆党の地方の支部、あるいは一地方雑誌のグループといっても、侵略戦争に反対し、国民主権をめざした日本共産党に接近しつつあるグループ（注12）であったのである。

注11……「座談会」（『随筆柿』所収、一九六七年）の発言、同趣旨のことを「ありし日の小林多喜二について」（多喜二没後六十周年記念集会の講演、一九九三年四月十八日）でも述べている。なお菊池敏清の略歴は裏表紙、文芸活動は特別編参照。

注12……「座談会」（『随筆柿』所収、一九六七年）の発言

注3……裏表紙参照。なお彼の表記は一般的には「菊池（小林）邦作」とし、小林姓の時点のことは「小林邦作」も使用した。

注4……「群馬県社会運動の歩み（下）」の「（二）伊勢崎警察署占領事件 小林多喜二を迎えての一齣」（『労働運動史研究』所収、一九六〇年一月号）

注5……「伊勢崎町の社会民衆党支部を中心とする文化団体」（『群馬県史』、一九九一年）、「伊勢崎町の社会民衆党支部が中心の文化団体」（『伊勢崎市史』、一九九一年）

注6……一九二三年（大正十二）年九月三日より関東大震災の混乱に乗じて、県内に組織された社会科学の研究・普及組織が弾圧された。中心だった高津渡は公判中に病死、二五年十二月大審院で藤田悟、川村恒一、町田算、尾池真弓は実刑となった。小林邦作は執行猶予付きの有罪であった。（一倉喜好「群馬県青年共産党事件」（『近代群馬の行政と思想・その二』、一九八五年）及び同「単純な研究団体二過ギナイノデアリマス」（『近代群馬の行政と思想・その五』、一九八八年）

注7……菊池（小林）邦作『無産党の行方』（一九五九年）

注8……丑木幸男「無産運動の分裂」（『群馬県の百年』、一九八九年）の「無産政党支部一覧」に社会民衆党伊勢崎支部は昭和四年十一月二十日に六十名で発足している。

注9……尾池真弓・小林邦作・岩丸波太郎の「群馬県青年共産党事件」の被告のグループが単純な右傾化を辿ったとは考えにくい。日本共産党の合法的機関紙として「無産者新聞」が一九二五年九月に発行されると、尾池真弓は群馬支部長となった。彼の入獄により、小林邦作が引き継いでいる。また、労働農民党からの分裂が起こった時には、分裂阻止に奔走した様子が（注7）には叙述されている。今後の検討課題である。

注10……群馬における三・一五事件では、一時共産党中央委員長になった佐野文夫、「群馬県青年共産党事件」で服役を終え、労働農民党の指導者となって

いた川村恒一、無産者新聞の発行責任者になった佐波郡玉村町出身の関根悦郎、高津渡の盟友であった画家の久保一雄、旧滝川村斉田出身の田口ツギが逮捕されている。(富沢実『群馬県社会運動物語』、一九六八年)一九二九年一月二十九日には、桐生の朝倉健太郎を中心に共産党の群馬県党組織が結成され、県内において、入党工作が進められた(『日本共産党の六十年・群馬県』、『前衛』一九八四年十二月号所収)。四・一六事件の検挙者を報道した東京朝日新聞では、現玉村町の関係者として旧滝川村板井の羽鳥辰之助、佐波郡芝根村の梅沢弥七も入党したと報じている。(群馬県労働運動史編纂委員会『群馬県労働運動史上・先駆けの人びと』、一九七四年)四・一六事件で共産党の県党組織は壊滅した。その再組織は「奪還事件」以後となる。ナツプ作家を迎え、検束から解放した「奪還事件」の影響を考へることも必要であろう。

注11……『無青』弾圧事件の半年前の五月には、斎藤力と菊池盛男は伊勢崎合同労働組合(支部)を結成している。また「奪還事件」直後の一九三二(昭和七)年一月には消費生活組合も結成している。(『伊勢崎市史』、一九九一年)彼等は無産政党無力論に傾き、前年七月に無産政党の合同で生まれた全国労働大衆党佐波郡支部を解散している。(『上毛新聞』一九三二年一月二十一日付朝刊)これらの行動には、共産党の再建をめざす泉吉治と行動をともした堤源寿・福田正勝の影響が想定されるが、今後の検討課題としておく。二人は二月十一日の反建国祭闘争を菊池敏清とともに闘っている(『東京朝日新聞群馬版』二月十二日付、『上毛新聞』二月十三日付)が、九・一二弾圧事件で検挙され、ともに懲役三年の実刑を受けている。(富沢実、前掲書)

注12……菊池(小林)邦作「拷問」(『随筆 柿』所収、一九六七年)には、九・一二弾圧事件で小林邦作の受けた拷問が生々しく描かれているが、「奪還事件」以後前橋に転居し、東京からのオルグをかくまったり、「赤旗」三部を極秘配布していたりして、共産党へ接近した様子が描かれている。また再建された共産党の群馬県党組織の責任者泉吉治から入党審査を受けたことなども書かれ

ている。

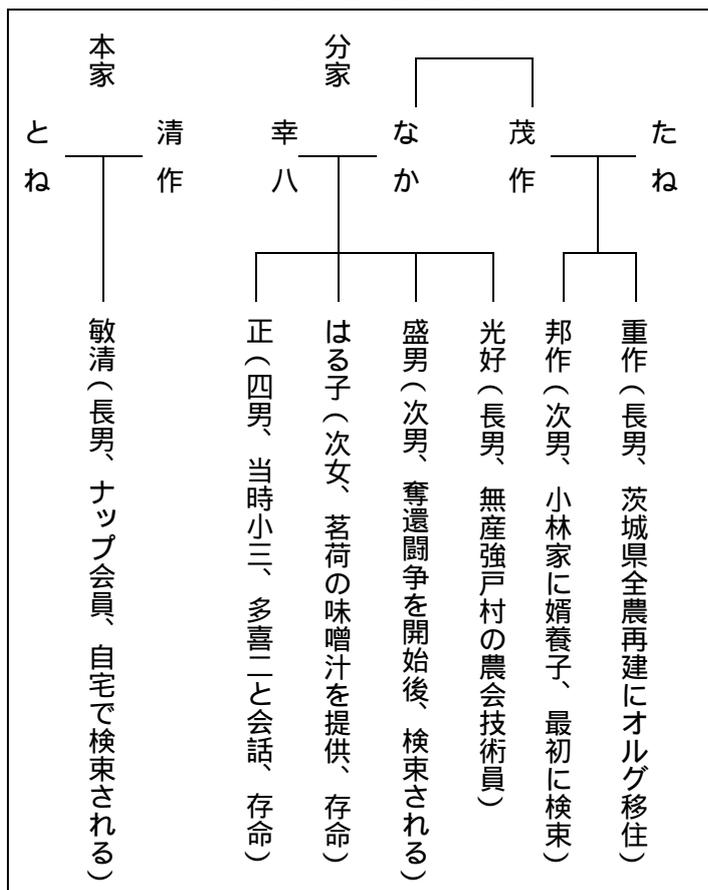
2 『群馬戦線』と『上毛大衆』の概要

『上毛大衆』発刊の契機となった『群馬戦線』についても考察の対象とする必要がある。両雑誌が群馬県近現代史研究の中で全く注目されてこなかったというわけではないが、十分な検討が行われてきたとは言えない上に、残念ながらプロレタリア文学としての側面から両雑誌を把握するような所論には接することができなかった。また、「多喜二奪還事件」との関連で両雑誌を把握した研究も存在していないようである。本資料集の名称は、本来なら「歴史的前提」とすべきであろうが、このような状況を勘案し、「文学的前提」とした。

まず両雑誌についての概要であるが、『群馬県史』では「昭和三年十月に日本労働党県連合会の首脳部が脱党して社会民衆党に入党し、十一月にはその機関誌『上毛大衆』(編集発行人菊池重作、主筆小林邦作)を創刊した。同誌は創刊以来しばしば発禁処分を受け(四回)、同五年八月からは『宣戦』と改題したが(編集発行人小林邦作)、直ちに発禁処分になった。」と述べている。『伊勢崎市史』では『群馬戦線』にも触れて「菊池光好の編集する『群馬戦線』の創刊は昭和三年十一月である。翌十二月には『上毛大衆』が創刊された。これは菊池重作の編集であるが、主筆の小林邦作は重作の弟で、東京高等蚕糸専門学校を卒業、蚕種業のかたわら意欲的に社会運動に取り組んでいた。」と叙述している。

ここで簡単に茂呂の菊池家に触れておくことにする。何人もの菊池姓が登場し、混同する可能性もある。次頁の「茂呂の菊池家略系図」(注1)は「奪還事件」に関連する範囲に限ってある。まず多喜二たちが立ち寄り、検束された菊池敏清宅の菊池家は本家に当たり、敏清は第十三代当主という位置にあ

茂呂の菊池家略系図



った。次に本家に対し、比較的早く分家した家系は通称「新田（しんでん）」と呼ばれた。幸八・なか夫婦は八人の子どもがいたが、この「新田」宅で多喜二たちが早い夕食を食べたわけである。本家の敏清宅と「新田」宅の距離は三、四十メートルであった。この「新田」の光好・盛男兄弟と重作・邦作兄弟は従兄弟であった。重作・邦作の父茂作は早世し、母・たねは実家に戻ったために、茂作の妹にあたるなかと幸八の夫婦が残された子ども達三人を養育した。つまり、『群馬戦線』『上毛大衆』の編集発行人は同じ茂呂村の、従兄弟同士であり、一時期同じ屋根の下で暮らしていたのである。

この両雑誌の内容については、一倉喜好「我等は死を賭しても、我が『群馬戦線』を守る！」(『近代群馬の行政と思想』第四巻所収、一九八七年)が

詳しい。一倉論文では、日本労働党群馬県支部連合会の幹部の集団脱党と社会民主党への入党の経緯が詳細に検討され、両雑誌発刊の経過が跡づけられている。また、文芸欄を除く記事のほとんどについて、内容的な検討を行い、『上毛大衆』から『宣戦』への発展に権力との対決姿勢の先鋭化をみているが、両雑誌の性格を「小作人を対象とした雑誌」と規定した点は問題が残ると思われる。さらに、丑木幸男は『上毛大衆』・『宣戦』の進歩性について一倉論文を受けて、「同誌は社会主義の基礎理論の解説、文芸欄の設置など、一般に読みやすくする配慮がされている。社会主義の啓蒙をおこない、政治・社会体制を批判した。社会主義が県内にかなり広範に浸透していたことを示している」(注2)と高く評価しており、本稿も共通の認識に立つものである。この文芸欄は『上毛大衆』ばかりでなく、『群馬戦線』にも設置されていた。本稿では、両雑誌の対抗関係よりも、まずそれらの文芸欄に見られる、共通のプロレタリア文学的傾向に着目するものである。

注1……菊池敏清監修『茂呂の菊池家家譜』(一九七七年)、菊池正「我が心の旅路(上)」(二〇〇〇年)、菊池(小林)邦作「母」(『随筆柿』所収)等を参照して筆者が作成。

注2……丑木幸男、前掲書

3 『群馬戦線』と菊池光好

初期のプロレタリア文学は、『種蒔く人』から『文芸戦線』に発展した。ナップが成立し、『戦旗』が発行されるまで、『文芸戦線』はプロレタリア文学運動の中心であった。この頃には、群馬出身者では、新井紀一や萩原恭次郎、岡田刀水士等が作品を載せているが、菊池光四次のペンネームで菊池光好(注1)の「春の進行曲」(注2)が載ったのは、一九二六(大正十五)年の五月号であった。菊池光好は佐波郡茂呂村の出身で、小林邦作とは、従兄弟で

11月号戦線俳壇		
小澤南華	新田	東毛
半田葉仙	碓井	
鈴木健一	桐生	東毛
市川古山	埼玉	
對比地魚泉	邑楽	東毛
佐藤華春	山田	東毛
岡田サナイ子	新田	東毛
飯塚凡美	新田	東毛
櫻井其外	佐波	
原田幸穂	桐生	東毛
斎藤松月	勢多	
町田六華	佐波	
五月女五山	勢多	
田村塊	佐波	
大川利光	新田	東毛
大島不倒翁	新田	東毛
田部井紅柳	新田	東毛
吉岡一峯	碓井	
選者	(新田)	東毛

12月号戦線俳壇		
登坂城河	勢多	
石山虎眼子	山田	東毛
岩井田貧女	桐生	東毛
櫻井國北	前橋	
山田てる女	邑楽	東毛
大川まさの	新田	東毛
富岡一水	北甘楽	
しづが女	新田	東毛
小林錦糸	新田	東毛
大内静枝	前橋	
宮澤元一郎	未記載	
小林喜月	新田	東毛
勸農子	佐波	
選者	(新田)	東毛

(選者の(新田)及び右側の東毛については、筆者記入)

あった。東洋大学文学部に進むが、途中で帰郷する。詩誌なども発行するが、小林邦作の影響で、思想講演会などにも参加し(注3)、須永好の無産強戸村の農会技術員となつてからは、須永好の右腕として活躍する。この菊池光好と葉山嘉樹の関係については、小正路淑泰「葉山嘉樹と 地方」(『社会文学』第一九号所収、二〇〇三年)は、特別な交友関係があつたことを指摘するとともに、葉山嘉樹や里村欣三などの文戦派と須永好の強戸村とのつながりも明らかにした。文戦劇場もやってきている。早くから『文芸戦線』の読者・投稿者であつた菊池光好は、一九二八年夏頃機関紙発行の話しが盛り上がる

と、その準備の中心となり、日本労働党連幹部の脱党事件の最中にも、『群馬戦線』の発行準備を進めたのである。創刊号の十月の号はゴタゴタの中で発行できず、実際に

月号であつた。既にナツプが成立し、『戦旗』が発行されていることから、雑誌名に『群馬戦線』と名付けることは、文戦派としての立場、あるいは親近感を表明することになるだろう。

総合雑誌の形式で発行された『群馬戦線』についても、一倉喜好によつて、その内容等が考察されているが、文芸欄の追求はされていない(注4)。本稿もテクストの文学的な読解を行うものではなく、作者・作品のプロレタリア文学志向を確認するという最低限の作業にとどめたい。

創刊号の十一月号に載せられた「農村風刺劇」とされた戯曲茂呂光吉「西瓜畑の糞」は、菊池光好の作品である。小作人彌助の西瓜畑の西瓜が盗まれ、そこに残された糞を拭いた紙片から、犯人が地主であると判明する小品である。巡査が地主の肩をもつ様子がリアルである。最後の吉太郎の「なあ、俺達は地主とその親類みてえな奴を世の中から追っ払ふまで戦ふんだよ。」という言葉が、主題そのものを伝えている。

十二月号には、菊池光好は茂呂光吉名で「野良に咲く花」という小説を載せている。これは「幸作」と「お君」の物語である。二人には互いに結婚しようという想いがあるが、「お君」は東京に出て、「夫婦共稼ぎの生活」に憧れる。しかし、「幸作」は「野良に踏み止ま」と決意した胸中をなかなか言葉にできないでいたが、とうとう彼は「組合」(農民組合)を「裏切」れない、「死んだって組合を守らなくてはならない」という思いを語るのである。一月号は、自らの小説で発禁となり、そのまま『群馬戦線』は廃刊となつたが、この二作品を見る限りプロレタリア文学と見て間違いないであろう。十一月号には菊池光好の戯曲以外に短歌と俳句、十二月号には彼の小説以外に詩と俳句が載せられている。俳句のみ選者名が明示されているが、「大川帆三」は、日本労働党連混乱の中で書記長となつた大川三郎である。十二月号に選者の講評が載っており、「生活の表現 個性の發揮等」を重視していることがわかる。俳句には、作者の住所地も付いており、次ページの表

を見ると、強戸村のある新田が約三分の一で、新田を含む東毛（群馬東部）では半数を越している。多くが農民や小作人だった可能性がある。農民組合が村議会で多数を占め、村長を指名した無産強戸村を支えた力の一つに、農
民大学などの教育活動が挙げられている（注4）が、それを実感させるものである。この点を考えると、一倉喜好が「小作人を対象とした雑誌」と定義したのは『群馬戦線』については当てはまりそうである。

一二月には、三編の詩が載っている。どれも戦いの気迫に満ちた詩である。木暮正一「不作だいは遊んでる奴等」に「俺らの××の要求をはたき突ける」とある。小松文吾「前進せよ」は「若き闘士」に「敵墨めがけて突進せよ」と呼びかける。

最後が光好の弟の盛男である。「友よ！奮ひ起て」はまだ戦いの戦列に加わっていない「友」、未来の「同志」に、「正義のために」「起つて、奮ひ立つて友よ ××を打ち建てろ」と結んでいる。

以上のような内容を持つ『群馬戦線』文芸欄をプロレタリア文学と規定することに大きな問題はないであろう。むしろ民衆自身が主体的・意識的に文学の創造に参加した社会活動として見直されるべき時期を迎えている。

注1……菊池光好は一九〇六（明治三十九）年～一九八七（昭和六十二年）
文芸誌『かぶらはん』に彼の「強戸農民運動史」が連載で活字化されている。

注2……「春の進行曲」全文（下段）

注3……「春の進行曲」の副題が「高津渡」であることに注目したい。

注4……一倉喜好「我等は死を賭しても、我が『群馬戦線』を守る！」（『近代

群馬の行政と思想』第四巻所収、一九八七年）、須永徹『未完の昭和史』（1986）によると、創刊予定だった巻に「まるくす・ぼつい」、発禁号には発禁の理由となった「村の子供たち」という光好の小説が載る予定であった。

注5……前掲、小正路淑泰論文。

春の進行曲

菊池光四次

——高津渡の驛に——

A

ドツシム

ドツシムくドドドドドドドドドド……

未来へ！ 未来へ！（春の足取り）

春の朝の 次第に明けてゆく

小作人達の 覚悟に

地主の築山の 花辨は青ざめて散るよ。

あゝ 空にきく進行曲——

解放の日も近づいた

そして小作人の心にも明るい五月が

竹槍の及先に赤い血の波が打ちよせる

五月 五月

B

小作人×××握手！握手

勞働者

太陽は朝の丘で

草色の旗をふつてゐるぢやないか

——遮断線がそこに落ちてきたつて

おめ おめ解散する必要があるもんか

さあ ゆかう ゆかう

進め 進め

兄弟よ 俺の手は熱い熱い

君のも……もう一度握手をやらう

C

ドツシムくドドドドドドドドドド……

歩調を合せて

自由の歌を合唱しよう。

濕地には 竹の子が

俺達の交響樂をきいてどんなに嬉しい

——暗い冷酷の日ばつかりだつたんだよ

空には生血色の旗印が愉快に羽搏く

明るい五月の空

解放の日はちかづいた。

4 『上毛大衆』 同人と「多喜二奪還事件」

次に『上毛大衆』であるが、こちらは昭和三年十二月創刊号からほぼ継続して、昭和五年一月号まで発行され、前出の一倉論文によると昭和五年二月、三月にはタブロイド版が発行されたよつである。そして、『上毛大衆』を改題した『宣戦』八月号が発行され、発禁となり、そのまま廃刊となった。昭

和四年三月号は発禁、六月号と十月号は休刊で三号が欠けている。だが発禁の昭和四年九月号と昭和五年『宣戦』八月号は保存されており、十二号が現存している。タプロイド版については、一倉論文で知るのみである。

文芸の特徴を見ると、残された全号に文芸欄がある上に、二回の「プロレタリア文芸号」（昭和四年八月号・同五年一月号）が組まれている。

昭和四年二月号に載った『上毛大衆』の同人二十九人（本書七十一頁）の中で「奪還事件」の関係を表に「」で示した。これは、菊池（小林邦作の「奪還事件」の回想や記録から特定したもので七人いる。そのうち六人が地元活動家である。小林邦作は菊池敏清宅で多言一とともに検束され、検束を逃れた菊池盛男は、講演会会場の共栄館に駆けつけ、奪還闘争を開始し、解放の陳情の中で検束されている。二人とも茂呂村であるが、小林邦作

『上毛大衆』同人一覧における奪還事件参加者			
『上毛大衆』同人	事件参加	小林文右衛門	
岩丸波太郎	応援	駒崎力三	
内川良雄		澁澤廣吉	
内山留一郎		杉田謙作	
遠藤可満	応援	田村栄太郎	
尾池真弓		藤田睨	
大澤要		町田六合三	
大澤芝秋		マッド・アップル	
大野勇喜		宮川善三	
岡田熟		三好徳次	
川島健司		弥勒寺清	
菊池重作		村田一	
菊池盛男	検束	柳田幸太郎	
光山玉次		山銅喜八郎	
小林邦作	検束	吉田庄蔵	

は茂呂村今泉である。岡田熟は豊受村（現伊勢崎市）の活動家、澁澤廣吉は茂呂村である。弥勒寺清は采女村（現伊勢崎市）の小作争議を闘った農民活動家であった。吉田庄蔵は茂呂村今泉の吉田印刷社長であり、文芸講演会を決定し、その中で指導的役割を果たしている。他に菊池重作と村田一が茂呂村であるが、菊池重作は全農中央の要請で茨城県にオルグ派遣されていた。応援に駆けつけた遠藤可満（かまん）は、警察側との交渉の中心の一人になった。この遠藤可満と岩丸波太郎・尾池真弓・小林邦作の四人は、日本労農党から社会民衆党への鞍替えを推進した仲間である。遠藤可満の談話に「前橋だけでも三十人行った。尤もこの中に大胡の連中もいた。」とある。この日、県議選に全国労農大衆党から立候補していた尾池真弓の演説会が大胡で開かれていたのである。候補者の尾池真弓は駆けつけられなかったが、岩丸波太郎は当然駆けつけたであろう。遠藤可満の「大胡の連中」という言い回しに岩丸波太郎の存在を感じるが、確認できないので、「」とした。

5 『上毛大衆』の散文について

散文は、小説十五作品、戯曲三作品、随筆三作品、評論六作品の二十六編が掲載されている。すべてに渡っての言及は避けて、いくつか特徴的なことに触れる。

まず全体として小説が半分以上であるが、評論の比重が小さくない。昭和四年一月号に尾池真弓が「マルクス学説の概要」という科学的社会主義の入門を書いており、社会主義理論への関心が高いのが、文芸評論重視に影響しているのではないだろうか。文学理論について、吉田庄蔵が「文学の本質に就いて」、「新興文学発生の理論的根拠」で扱っている。吉田庄蔵は、敗戦直後に『潮流』を発行し、一躍『潮流』を全雑誌にした。岡本哲哉「地方プロレタリア文芸雑誌の任務について」や内山繁「文芸運動の任務」では、群馬

『上毛大衆』文芸欄の散文			
昭和3年12月号			
昭和4年1月号	小説	杉田謙作	彼とおきん
	小説	大澤要	誓文奇譚
	評論	吉田庄蔵	文学の本質に就いて
昭和4年2月号	小説	杉田謙作	久闊
	小説	大澤要	モデル成金
昭和4年3月号発禁			
昭和4年4月号			
昭和4年5月号	小説	石田龍蔵	姿態
昭和4年6月号休刊			
昭和4年7月号	小説	小林邦作	義民高橋五太夫
	小説	素地文村	印旛の渡し
昭和4年8月号 プロレタリア文芸号	戯曲	榛名杏二郎	戯曲 夜
	随筆	美津山晃	モダン文学ボーイを退治せよ
	小説	磯田沙路	検束
	戯曲	赤城甘人	戯曲 国定忠治
	評論	吉田庄蔵	新興文学発生の理論的根拠
	評論	岡本哲哉	地方プロレタリア文芸雑誌の任務に就いて
	評論	内山繁	文芸戦線を如何に闘うべきか
	随筆	尾池真弓	芸術の苦笑・上州小唄のことども
	昭和4年9月号発禁	戯曲	榛名杏二郎
評論		島武吉房	文芸論陣 我々はかく批評する
昭和4年10月号休刊			
昭和4年11月号	随筆	松村文一路	随筆 秋が来たけれど
	小説	S.K.	女給・女車掌
	小説	素地文村	艶書事件
昭和4年12月号	小説	大野金治	女工になった妹からの手紙
昭和5年1月号 プロレタリア文芸号	小説	渡良瀬潤	下獄
	小説	大野金治	がんばる
	小説	茂呂光吉	駈落ちしたお葉
	小説	小林邦作	ある懺悔
昭和5年8月号発禁 『宣戦』に改題	評論	内山繁	文芸運動の任務

県のプロレタリア運動の課題や運動内部の矛盾点などが探られている。後述する。

小説では、同人でもある杉田謙作が二つの小説を載せている。彼の本名は斎藤近衛で東洋大学を卒業し、当時前橋地方検事局書記であった。主筆の小林邦作が二つの作品を載せているが、「ある懺悔」は、警察官の拷問・冤罪を取り扱っている。磯田沙路「検束」、渡良瀬潤「下獄」は、当時の活動の

困難さを伝えている。「下獄」は、一九二三年の「群馬青年共産党事件」で一四人が起訴され、うち四人が大審院で実刑となった。彼等の服役の日（下獄）を待つ日々が描かれている。小林邦作「義民高橋吾太夫」、素地文村「印旛の渡し」、赤城甘人「戯曲 国定忠治」等は歴史小説である。また、榛名杏二郎「戯曲 夜」、S.K.「女給・女車掌」、大野金治「女工になった妹からの手紙」は労働現場を背景にした作品である。小説では最後に、『群馬戦線』の編集発行人であった菊池光好の作品「駈落ちしたお葉」が採用されていることを指摘しておく。

随筆の松村文一路「秋が来たけれど」は、地方新聞記者の日常の様子や伊勢崎での生活の想いを叙述する。「松村文一路」は創刊号に詩「莨（たばこ）の煙り」を書いた松村文一郎のペンネームである。そうであるなら、『須永好日記』（一九六八年）の昭和四年五月十九日に「朝日新聞伊勢崎通信員松村文一郎君来訪」とあり、記事の依頼等をしていることから、彼は「朝日新聞伊勢崎通信員」だったことが判明する。昭和三年秋に赴任し、約一年経過した時点の随筆である。奪還事件は二年後であり、そのまま彼が伊勢崎通信員として在職しているなら「東京朝日新聞」の「奪還事件」関連記事、中でも、九月八日付夕刊の「伊勢崎電話」の記事「ナツプ系文士奪還で乱闘」は彼によって伝えられたものということになろう。

6 『上毛大衆』の韻文について

韻文は、近代詩が五十五作品、作詞が六作品、短歌が延べ四十一人の計二百六首、俳句は十五人の五十九句ある。

群馬県は萩原朔太郎の出身地であり、多くの詩人やプロレタリア詩人を輩出している。その点については後で触れる。

左の表の中で、奪還事件に名前が登場するのは、弥勒寺清、菊池盛男、島田登司である。前二者は同人でもある。島田登司は豊受村在住であった。さ

『上毛大衆』の詩人、詩題一覧		
昭和3年12月号	松村文一郎	菫の煙り
	弥勒寺清	捨てられた狗を歌う
昭和4年1月号	鳥島健三郎	工場の煙
	菊池盛男	奴等の夢を破る
	村田一	プロを歌ふ
	菊池豊吉	貧苦に生育する生命
	鳥唐樹	麥の芽
	立見生	右と左り
	岡部宇一郎	夢
	横堀真太郎	放浪生活詩
	椎之木源太郎	失業して
昭和4年2月号	岡田實	我等の太陽
	シドノ・マイケル	タくれ
	菊池盛男	吹雪
	村田一	あかつき
	吉田とり子	悶え
	新井彌一	戦線へ
昭和4年4月号	吉田とり子	めしい鳥
	松井三七	草
	同上	女工行進曲
昭和4年7月号	松井三七	春・月夜
	茂木とく	A 梅雨期の空
	同上	B 夕
昭和4年8月号	野守知象	午後の寸描
プロレタリア文芸号	沖黄	銀座裏にて
	同上	闇房にて
	同上	蜜蜂は
	同上	桃林にて
	寿満子	夫に贈る言葉
	遠山麗子	歓喜
	吉田とり子	工業地の朝
	海老原武	酒に眠りを求めて
	H生	道草
	村田一	俺れ達の仕事場
	菊池盛男	おゝ牛車よ
	シドノ・マイケル	仕官式
昭和4年9月号	潜彌勤	硝子玉の眼
	磯田沙路	九月二題
	沖黄	廻転と旋転と輾転と
	相場誠哉	入営する弟よ
	島田登司	崖の上の人間よ
	高木孫次郎	プロの途上感
	羽尾島子	思慕
	茂木とく	秋の夜
	齋藤代志緒	或る人に
昭和4年11月号	潜美六	雨にたたかれた安燈骨程お前は細い
	遠山麗子	小さな争いだが……。
	鈴木つるの	上簇終了の夕
	須満子	きよ坊の最後
	シドノ・マイケル	夜のおもひ
	鳥唐見	みのる おかだにおくる
	渡邊昌月	落日
昭和5年8月号	原島清	奴隷解放宣言
『宣戦』に改題	島田登司	宣戦布告
	潮喬二	俺等の戦場へ行かうで
	同上	税金に苦しむ

らに、伊勢崎在住という点でいえば、東京朝日新聞伊勢崎通信員の松村文一郎、三郷村（現伊勢崎市）の童謡詩人の横堀真太郎、茂呂村で菊池光好と詩集を出していた岡部宇一郎、同じく茂呂村の菊池豊吉、村田一の名前がある。左傾化という点を考えると、原島清「奴隷解放宣言」において「帝国主義戦争絶対反対」をはっきりと打ち出し、潮喬二「俺等の戦場へ行かうで」は、「血塗られた一九二八、一九二九、つまり、「三・一五と四・一六」の犠牲者を「兄貴達」と慕い、「渡政と山宣」を犠牲の象徴と見て、共産党の立場に立ちきっている。

『上毛大衆』の歌人、歌題				
昭和3年12月号	田澤連三	あの頃の歌	10首	
	彦星生	思ひ出	4首	
昭和4年1月号	シドノ・マイケ	山をくだり	4首	
	小林文雨朗	生活雑片	7首	
	小林あき子	最低に病みて	5首	
	金子角司	新生活に起ちて	5首	
	田澤きわ子	×	3首	
昭和4年2月号	小林文面朗	春頭雑詠	8首	
	小林きわ子	かなしき早春	4首	
	吉田とり子	歳末雑詠	4首	
	赤石N子	思ひ出	4首	
	生	春日雑詠	5首	
昭和4年4月号	荻島獨穂	訓練所雑感	9首	
	連無三	時事漫歌	6首	
	吉田とり子	(無題)	5首	
	芙三雄	(無題)	5首	
昭和4年7月号	洪澤要	惨めなれども	6首	
	檜山嵐	澁澤廣吉氏に寄す	5首	
昭和4年8月号 プロレタリア文芸	磯田沙路	断片	10首	
	渡良瀬潤	牢獄にて	9首	
	洪澤要	惨めなれども	7首	
	檜山嵐	心の断面	5首	
	中村庸吉	手紙の因果片々	5首	
	遠山麗子	追憶	4首	
	鈴木富士江	たへがたき熱情	4首	
	羽尾島子	×	1首	
	昭和4年9月号	原島清	雄辯大会	7首
		渡邊静七郎	失業者の歌	7首
檜山嵐		心の断面	7首	
齋藤代志緒		労働者の唱へる	5首	
美津山晃		馬鈴薯	4首	
遠山麗子		愁想	4首	
小野里雅秋		真夏の桑原にて	3首	
野村榮一		×	1首	
齋藤好		有権者に	1首	
吉田とり子		亡き父	3首	
昭和4年11月号	磯田沙路	若き同志におくる	5首	
	原島清	発禁に抗して	6首	
	遠山麗子	秋日	5首	
	須満子	×	5首	
	齋藤代志緒	俺の心	3首	

『上毛大衆』の俳人		
昭和3年12月号	赤城子	4句
	五山	5句
	翠山	5句
昭和4年1月号	赤城子	3句
	白鳥	5句
	町田印刀子	5句
	せきりや庵	2句
	乾峰月	4句
	大澤芝秋	4句
昭和4年2月号	久保田白鳥	10句
	桃源	6句
	静代女	2句
	閑々保	2句
	吉田とり子	1句
昭和4年4月号	田代しで帆	1句

次に短歌・俳句である。俳句より短歌に力点が置かれていたようだ。「奪還事件」との関わりでは、茂呂村の洪澤要がいる。彼は一九六七年度の「伊勢崎署占領事件の真相を語る座談会」に出席しているので、事件に関わったと考えられる。

散文や詩の作者と同じ人が書いている例が何例かある。小説では、磯田沙路と渡良瀬潤である。ともに小説と対応するような歌を詠んでいる。たとえば磯田の「検束」に「金さんの美しい横顔が淡い電燈の光りに照されて青白く……彼女はうつむいたまま何か深い思案に更けていた。」とあるが、歌の一つに「留置場の中でなくさめあいました社会主義者の異国の少女」とある。また渡良瀬の歌は「留置場」「監獄」の日常風景とその悲哀を詠っている。

るが、小説「下獄」と響きあっている。短歌で作者が詩と重なるのは、六人いる。シドノ・マイケル、吉田とり子、原島清、齋藤代志緒、遠山麗子、寿満子である。

7 『宣戦』掲載の文芸評論をめぐって

散文のところでは若干触れたが、内山繁「文芸運動の任務」は『上毛大衆』グループの内部事情やプロレタリア詩人達の当面した課題等を鮮明に伝えている。

内山は、論文の前書きで「同志島田の態度を批判するため書かれた」が、

島田は「誤謬を精算し」たため、彼自身にはもう必要はないが、「多くの人々の陥り易い誤謬」だから、あえて発表するとした。

島田は、上毛プロレタリア詩人同盟を組織し、機関誌『血と汗』を創刊する予定だが、内山は（プロレタリア）芸術運動の機能は大衆の「アジプロ」にあるとし、実践闘争へのプロ詩プロ短歌の利用（ピラとか朗読会、会合時）を強調する。そうすれば、特定の発表機関（この場合、詩誌である『血と汗』）は必要のないものといひ、さらに、現段階では、一部の特殊雑誌の創刊は我々の運動の拡大を阻止するとまで言って否定している。内山は、各分野を担当する各部門の一大総合的な雑誌が絶対的に必要だと主張し、ナツプの発展過程になぞらえたり、真のプロレタリアートの党は××党一つだから、同じように県下の階級雑誌は『宣戦』ただ一つと言いつつ切っている。

以上の中から、島田の上毛プロレタリア詩人同盟と詩誌『血と汗』の構想が浮かび上がってくる。この論文が発表される前に、「誤謬を精算」したという事なので、実現しなかった可能性が高い。この島田登司は詩を二編載せているが、『宣戦』の「宣戦布告」は、まさに権力との全面対決を志向し、民衆の団結によるゼネストで「世界は俺たちのものだ」として、「俺達の自由は闘争のなかで哄笑（わら）ってゐた」と結んでいる。この島田の県下プロレタリア詩人の連合という構想は、約八ヶ月後の昭和六年四月、プロレタリア詩歌集『全線』の刊行という全く別の形で実現することになる。

8 『全線』刊行の意義

ここで視点を全国のプロレタリア文学運動の

展開と重ねて、県内の状況を考えてみる必要がある。

プロレタリア文学運動の発展を『種時く人』から『文芸戦線』へ、次の段階をナツプの結成と『戦旗』の発行、『文芸戦線』の変化と考えたい。

佐波郡宮郷村（現伊勢崎市）出身で、大杉栄と親交があり、一九二〇（大正九）年の日本社会主義同盟創立大会にも出席した根岸正吉が労働詩集『どん底で詠ふ』を発刊した（注¹）が、一九二一（大正十）年には死去した。前橋の萩原恭次郎が上京したのが一九二二（大正十）年であり、『種時く人』に詩を載せている。彼は次第にアナキズムに傾き、詩誌『赤と黒』を発刊、村山知義等と『マヴォ』を出した。恭次郎は、一九二五（大正十四）年には、詩集『死刑宣告』を発刊し、衝撃を与えた。アナキズム系の詩誌『文芸解放』『バリケード』を出すのが、一九二八（昭和三）年には帰郷している（注²）。ちょうどこの頃から二年余り草野心平が群馬に住んだことで、群馬の詩作活動はより活発化し、横地正次郎、伊藤信吉、東宮七男等の詩人が大きく成長した。詩誌『学校』が七号まで発行されたの（注³）が、それを象徴している。

高橋辰二	
海を越えて	28-6
夏 谷川	28-7
故郷	28-8
海	28-9
中华民国	28-10
村よ・お前の求める一党へ!	28-12
同志よ 樵夫・炭焼・小作人	29-12
奴隷の唄	30-2
農民!	30-3
兵隊へ行く	30-5
横浜を眺める	30-6
電柱の話〈労農詩集〉	30-8
貧困児童	30-9
「納税延期」	30-10
山の飢餓	30-10
食はせろ!! 働かせろ!!	30-12
にせ物の社会	31-1
青年訓練所	31-1
官林にかこまれた村	31-2
我々の詩について	31-3
九十九里	31-4
千葉に於ける八日間〔共同執筆〕	31-4
機関銃	31-5
飢餓時代〈社会観察〉	31-5
銃工場	31-6
上陸禁止	31-7
せち辛い人生	31-8
淋しい横浜港	31-9
農村	31-10
野宿をして生きる時代	32-4
産業予備軍	32-5
失業者の手記〈随筆〉	32-5

(『文芸戦線』復刻版別冊索引より)

一方、旧北甘楽郡額田部村（現富岡市）に育った高橋辰二は、一九二七（昭和二）年に詩集『水葬』を発売。葉山嘉樹の知遇を得て、翌年上京し、『文芸戦線』の編集に関わるようになり、ほとんど毎号のように、詩が載るようになる。だが、『文戦』の終刊の翌年、三三（昭和八）年には帰郷した^{注4}。

他方、詩的アナキズムの中にいた伊藤信吉は、一九二九（昭和四）年上京すると、翌年には全協の労働運動やモップルの救援活動等の実践運動に関わる中で、プロレタリア詩人会議や日本プロレタリア作家同盟に参加。ナツプの機関誌『ナツプ』の編集実務を担当するようになった。伊藤は『プロレタリア詩』『戦旗』『ナツプ』等に詩を発表するとともに、詩誌『労働派』『前衛詩人』を発行し、

そこにも詩や評論等を載せた。しかし、三三（昭和七）年検束・拷問の中で転向し、帰郷した^{注5}。

中央の対抗軸であった『文芸戦線』対『戦旗』という対立構図は、群馬出身の個人では高橋辰二対伊藤信吉であり、県内においては『群馬戦線』対『上毛大衆』とな

って現れた。

特に『文芸戦線』と『群馬戦線』は、上下関係はないものの、名称的にも人的にも直接的な結びつきを持った。その点を小正路淑泰の論文から確認してみよう。「葉山嘉樹が強戸村を訪れたのは」一九一九年四月下旬である。五月一六日に帰京するまで約三週間、強戸村に隣接する新田郡藪塚本町の藪塚温泉室田館に逗留し作品執筆にあたった。四月二四日には須永好と菊池光好が室田館に葉山を訪ね、楽しい一時を過ごしている。葉山は桐生市議選の応援演説もしている。一九三二年一月には、文戦派の里村欣三が群馬の農村を調査し、そのルポルタージュを『文戦』一九三一年三月号に載せた。それ

伊藤信吉（注5の「年譜・書誌」より詩のみ抽出して作成）	
1930年（昭和5年） 24歳	
「裏日本へ」	（『南方詩人』新春号）
「前夜」	（『労働派』創刊号）
「信号」	（『前衛詩人』創刊号）
「燕」	（『戦旗』5月号）
「引越しの日」	（『前衛詩人』7月号）
「燃える歌」	（『戦旗』8月号）
「上野駅で」	（『前衛詩人』第6号）
「燃える歌」	同上
「老いた母の言葉」	同上
石井秀との共作「星製薬争議左翼宣言」と総題した詩四篇のうち二篇「燃える歌」「老いた母の言葉」（『労働派』8月号）	
「信号 二」	（『前衛詩人』第7号）
「奪還の朝 大衆朗読詩」	同上
「戦線」	（『文学時代』9月号）
「飢餓を超えて」	（『戦旗』9月号）
「戦ひの前に」	同上
「波止場で」	（『詩・現実』第三冊）
「革命記念日に」	（『ナツプ』11月号）
「嵐の中に」	（『ナツプ』12月号）
「戦ひの前に」	（『戦旗』12月号）
1931年（昭和6年） 25歳	
「バルチザンの春」	（『ナツプ』2月号）
「朝」	（『プロレタリア詩』2）
「海」	（『若草』2月号）
「雪」	（『プロレタリア詩』3）
「引越しの日」	（『詩・現実』第4冊）
「二つの波に」	（『ナツプ』5月号）
「革命記念日に」	（『日本プロレタリア詩集 1931年版』）
「信号」	（『詩・現実』第5冊）
「ぬか雨に濡れて」	（『前線』創刊号）
「燕」	（『改造』6月号）
「霜」	（『前線』7、8月合併号）
「河」	（『ナツプ』8月号）
「海流」	（『中央公論』8月号 プロレタリア詩五人集）
「家系」	（『プロレタリア詩』9月号）
「霜」	（『ナツプ』9月号）
「川添に」	（『プロレタリア詩』10月号）
「夜風の中を」	（『ナツプ』10月号）
「海流」	（春陽堂版『明治大正文学全集』第六巻詩篇）
「あさ子に」	（『文学時代』12月号）
1932年（昭和7年） 26歳	
「夕寒の町で」	（『プロレタリア詩』1月号）
「手紙に代へて」	「ローザに」（『プロレタリア文学』創刊号）
「この日都会に」	（『プロレタリア文学』6号）

は「暗澹たる農村を歩く 主として群馬県下の農村に就いて」という題で十六ページにも及んでいる。このような無産強戸村をパイプとした群馬の農村と文戦派のつながりの深いというイメージは、高橋辰二の農民詩によって補強されたであろう。

これに対して、戦旗派と『上毛大衆』グループとのむすびつきは『戦旗』を媒介としたものとみられる。『上毛大衆』昭和四年八月号の岡本哲哉「地方プロレタリア文芸雑誌の任務に就いて」では、「中央の雑誌の縮小であつてはならぬ」とし「文戦や戦旗の縮小」では「見すばらし」いだけだとしており、必ずしも『戦旗』だけに傾倒していないが、グループの左傾化は、当然戦旗派へ傾くことになる。しかし、直接的なつながりというとなかなか見つからなかった。たとえば、伊藤信吉と『上毛大衆』に小説を載せた杉田謙作とのつながりは既に詩誌『学校』を出した時にはあった(注6)が、個人的な域を出なかつたと思われる。また、伊藤信吉が主筆の小林邦作と盟友にな

るのは、一九三二(昭和七)年九・二二弾圧事件で小林が激しい拷問の中で実質的な転向を強いられた後で発行する『蚕糸公論』の中(注6)であった。全国的にはナツプと『戦旗』の勢いが文戦派を圧倒し、文戦派の中からは離反者が続出したが、ちょうど群馬と文戦派のつながりが押し出される中でプロレタリア詩歌集『全線』は発行されたのである。『全線』の刊行経過についてここで詳しく明らかにできないが、萩原恭次郎全集の年譜は「群馬県下の意識的な詩歌人五十余名を結集して雑誌『全線』を創刊。高崎と沼田で文芸講演会をひらいた。」と記している。また群馬県立土屋文明記念文学館発行の『群馬の詩人』においても「群馬県の文学者を糾合して文芸誌『全線』を創刊」とあることから、彼が主導した動きであることは認められている。詩の作者や編集委員には、萩原恭次郎と伊藤信吉の友人が多い。横地正次郎、井田貞衛、東七人(東宮七男)は古くからの、南小路薫、小林定治、温井藤衛等は比較的新しい友人であった。つまり、この『全線』の刊行は、伊藤信

『全線』作者一覧(五十音順)

作者	第一作	第二作
青羽春天	上州の記録	
青柳花明	明日は日曜	ほうほう鼻
青山恒	思慕	
東七人	友への書	
天野純	朝・光・生活	
池田純一	近き女への第一信	
石田小三郎	金さん	
井田貞衛	利根河原	
鶴田隆幸	心胸	
浦野哲	狂暴	抗議
大島義雄	浅春の賦	
大友農夫壽	赤城登山	樹脂の香
大湊廣秋	無言の思索家	
小川静波	春季雑詠	
小澤義太郎	郊外への誘ひ	
小野吉郎	水喧嘩	
小見杜詩夫	風止む	ぬかるみち
狩野文男	抒情詩稿	
川端俊吉		
川端惣吉	すてた新さが	地藏さん
河邊謙一郎	夜	
栗原重治	八百屋の書いた詩	
栗原道子	嵐	向ふ側
黒井平太	梅が蕾を持った	無題
桑島雅子	詢作	秋立つ日
剣持定明	百姓の言葉	老車夫の死
小林絹次	冬	
小林定治	春来い	
小林秀子	古風な静けさ	
坂本伸一	足下から戦へ	
澤田亥之介	春	空ッ風
島田梅史	早春	
瀬木悦夫	村の女等へ	闇夜
鷹端彦録	ねこ	
竹本嵐子	角兵衛獅子	
タケヲ	無題	
田島武夫	薄明に描く	
田島嘉之	朗らかに瘠せる	金庫
田中孤影	近状	
土屋與志緒	楳火	
豊田宗作	臨原	
温井藤衛	復讐の念あり	
秋町三十八	早春	
萩原恭次郎	断片	
萩原憲	犬	誓ひ
萩原信使	嵐と渴望	
原登喜夫	吹雪を衝いて友は行く	
百海操	嫁ぎ行く人	風の日
布施義一	今日も	
古屋三郎	病床の春	
松本美二雄	もらひ泣き	こな雪
南小路薫	子供の詩	
宮澤正二郎	都市へ	
山村白鳥	労働者と紳士	
柚木厚太郎	雑詠	
横堀伊藤太	吹っ越し	
横堀竹華	春を待つもの	断片

吉が直接関わっていなくても、結果的に文戦派と闘う伊藤信吉の、またナツプの権威を群馬において高めることになつたと考えられる。

注1……群馬県立土屋文明記念文学館『群馬文学全集・第十巻萩原恭次郎・根岸正吉』(一九九九年)

注2……『萩原恭次郎全集・第三巻』(一九八二年)、注1参照

注3……群馬県立土屋文明記念文学館『群馬の詩人』(二〇〇四年)

注4……齊田明雄「高橋辰一・人と作品」(『群馬の昭和の詩人』所収、一九九六年)、『文芸戦線』(後期)復刻版(一九八三年)、「官林にかこまれた村」を齊田は「発表の機会がなく」としたが、『文芸戦線』一九三一年二月号に発表されている。

注5……瀧沢友子・梁瀬和男「年譜・書誌」(『伊藤信吉著作集・第七巻』所収、二〇〇三年)、『群馬県立土屋文明記念文学館』伊藤信吉 その文学的軌跡 詩と評論(二〇〇三年)

注6……伊藤信吉『回想の上州』(一九七七年)、『伊藤信吉』上州の空の下(一九三三年)

まとめにかえて……「文芸講演会」開催の諸条件

以上のような、文戦派と戦旗派の対抗の中に「文芸講演会」は準備されることになる。最後に「文芸講演会」が準備された諸条件を考えてみたい。まず、最初に書いた菊池敏清の「葉書一枚の要請」に注目してみる必要がある。この「要請」に応えた「文芸講演会」とはどのようなものであろうか。

多喜二たちナツプ作家の行った講演で最大のものは、戦旗社自らが企画した『戦旗』防衛巡回講演会である。京都・大阪で講演した後、三重県の松阪・山田(現在の伊勢市)を回っている。この松阪・山田での講演会は、地方都市での講演という類似性を持っている。他に戦旗社は、『戦旗』の夕べを開いている。二度目の『戦旗』の夕べは、「奪還事件」と同じ月の九月二十日に上野の自治会館で開かれている。これらの講演会は、戦旗社が設定するようであり、『戦旗』を通読しても、「葉書一枚の要請」に応える余地はないようである。

そこで、対象を戦旗社でなくナツプの方に変えてみると、機関誌『ナツプ』の一九三一年七月号に「ナツプ移動隊を利用せよ」という記事が載っている。

ナツプ移動隊とは、様々な集会を盛り上げるような出し物を用意するというもので、『ナツプ』参加の五団体がそれぞれの移動活動部(プロレタリア演芸団・プロキノ移動活動部・美術家同盟・音楽家同盟・作家同盟)をもっていたのである。各同盟毎にバラバラにやっていたのを、協議の結果、緊密な連絡の下に共同で移動隊を組むことになったのである。その記事には連絡先は「プロレタリア演芸団」、手紙の申し込みの場合は「集合の性質、人数、希望の『出し物』等に関して詳しく記してほしい。」とあり、「葉書一枚の要請」に応える可能性がありそうだ。

次に講師の側の意識を考えてみる。講師の一人であった村山知義は、奪還事件の回想で「主催者」を「農民組合の人」と思い込んでいる。これは、中野重治も同じだった可能性がある。中野の年譜には「伊勢崎市の全農青年部の講演会に小林多喜二、村山知義と出席、検束される」とより踏み込んだ記述になっている。実際に講演会の前に立ち寄った菊池敏清宅は、地主とはいえ、家の構えは全くの養蚕農家であった。しかし、最初に考察したように、この「文芸講演会」は、佐波『戦旗』支局と『上毛大衆』伊勢崎グループが「無産青年」という旗の下に行ったものである。講師側と主催者側の、このギャップは、どこに起因するのだろうか。それは、文戦派と群馬の農村が深く結びついているというイメージがナツプ側に強かったと考えざるを得ない。逆に、ナツプが『戦旗』の強い地域を突破口として、農村との結びつきを強化しようという意図が、葉書一枚の要請に応える条件にあったと考えたい。農民からの依頼という先入観は敏清宅の景観によって、裏付けられたであろう。「要請」に応える上で、プロレタリア詩歌集『全線』の刊行もプラスに働く条件の一つになり得るものである。

さて、残された多くの課題は、今後の検討事項となった。しかし、提起できる課題があるということが、「多喜二奪還事件」の真実の姿を究明する力になると信じるものである。

特別編

1 菊池敏清の文芸活動について

二〇〇九年七月十九日に旧菊池敏清宅の古民家調査が群馬県文化財研究会（桑原稔会長）によって実施された。伊勢崎・多喜二祭実行委員会では蔵書の一部調査を実施した結果、菊池敏清の未発表小説原稿等を発見した。「多喜二奪還事件」そのものとの関連を直接示す資料ではないが、その前後の資料を次に示すことにする。

まず一九三〇年に書かれた、自分の作品目録（資料1）である。旧制浦和高校時代から活発に創作活動を行っていることが判る。その後東京帝国大学文科に進学した。本資料集との関連では、著作「夜」という作品があり、一九二八年十一月七日脱稿、備考に『上毛大衆発禁』とある。この作品はその前に旧制浦和高校学友会雑誌に寄稿したが、「検閲拒否」になっている。作品の完成の日付は早い。発禁で内容が不明なのは昭和四年三月号『上毛大衆』だけである。他に発禁となった同年九月号と翌年の『宣戦』は、資料として提示した。ともかく菊池敏清が『上毛大衆』と直接関わりを持つ

ていた事実は重要である。その原稿と推定されるものを「資料2」として提示する。次に「奪還事件」直後に茂呂村で「舞踊と音楽の夕べ」を開催している。そのプログラムを「資料3」として提示する。

資料1

年次	作品名	発表日	掲載先
1919.6.29	作文三篇 (小川)	1923.5.30 1923.12.5	『創作のカ・純真篇』
	1925年までの記録	1925.9.13	
	1926年の或る記録	1926.2.21 1926の夏	
	大砲4砲	1926.11.28	1928.6.11. [学友会九号]
	荒れ行く花園	1928.5.25	[浦高時報七号]
	新しき争い	1928.6.14	(時報校内刊)
	夜	1928.11.7	(学友会雑誌刊) [上毛大衆 六号]
	北風	1928.11.7	[学友会十号]
	ホッソ	1928.11.7	[学友会雑誌刊十号]
	お月様の泣いた話	1928.11.7	[学友会十号]
	鬼ヶ島	1928.11.7	[学友会雑誌刊十号]
	秋風毛皮のついで	1928.12.1	[浦高時報七号]
	魚の波止場を見よ	1929.1.13	[浦高時報十号]
	手	1929.4.18	(浦高時報校内刊)
	一・和歌評	1929.6.10	[浦高時報十号]
	声画 其他	1929.9.12	[浦高時報十号]
	移動するカメ	1929.9.28	[浦高時報十号]
	詩一篇 — C.F.のわがやの思ひ出のわが、	1930.3.7	
	泥沼	1930春以降	
	行つてしまつた男からの便り	1930.9.27	[同窓会報六号]

夜

アンデルセンは幼年の私に優しく「月」話を語って呉れました。林房雄は少年の私に面白く「月」話を聞かしてくれました。その懐しい思ひ出に今私は此一篇を捧げます。

池一夜

私は都合の或る邸町を歩いてみました。このあたりは道路は美しく女派に舗装されて光つてみますし葉の茂つた

左衛門路樹の間には良い格好をした街燈が明るく輝いてゐます。其等は路の両側に規則正しくきちんとして並んで静まりかへつてゐました。

どの階も同じやうに石の壁と鉄の門に圍まれてゐて、

庭にははなはだ庭と大きな樹や草花や芝生泉水などが程よく配置されて所々に小さな亭やベンチが置かれてあります。丸々と太つた犬が、其小山で遊んでゐるの加よく見られます。

お家には奇麗な窓がいくつもついてゐて其中からあるものはみんな素晴らしい物ばかりでした。其一つの窓の景色のカパテンの間から覗いて見るとペールのかがつた小

▲ 影イケル印刷社

12 X 25

さな寝台の中に可愛らしい子供が氣持よささうに眠つてゐました。

其お隣の家では裝飾をした庭間に大勢の人が集つて居りました。燠爐は温かさうに燃えシヤンデリヤは光り妙な音楽の満ち溢れ右其都屋の中は誰も彼も美しい着物を身に付けて楽しさうに話をしたり御馳走を食べたり笑つたりしてゐました。

人々は生きてもゐることか幸福がたまらないうやうに見えてゐました。其中でたつた一人のけ者がゐました。

それは門の鉄の構につかまつてじつとぬを見つめてゐるを食の子です。この子は汚いなりをして裸足で何もかぶつてゐませんでした。

やかてを食の子は眼に一杯涙をためたまう針ボトボト歩き出しました。横の通りを二つの光つた大きな眼を持つた女派な自動車か走つて来ました。私はあやまちが無ければよいと思つてゐる間に、街角を向小へ越さうとしたい食の子はねとぼしてしまひました。そして其儘行

き過ぎやうとするのです。私がか心配して見てゐると幸に未合せたお巡りさんが自動車を呼び止めて乗つてゐる人に話掛りました。中には礼儀を著した紳士が居りました。名刺を一枚お巡りさんに渡すとお巡りさんは帽子を取つてペコウとお辞儀をしました。自動車はそれからすぐ走つて行つてしまひました。

▲ 影イケル印刷社

12 X 25

地面の上に轉かつてゐる倉の子は暫くしてやつと起
 上りました。えれに近附いて來左お巡りさんは無慈悲に
 叱つて追ひ立てました。
 可哀さうな飢餓の子はビツコを引き乍ら暗い小路の方
 へ歩いて行きました。
 この子は何故誰にも構つて貰へないのでせう。
 私は彼が物影にかくれてしまふまでシヨンボリとした
 姿を見送つて居りました。

シブレイ藝術クラブ第一回研究発表
 “舞踊と音楽の夕” (1931. 9. 18. 7.P.M.)

— 夕 夕 夕 —
 舞 踊

- | | | | | |
|------------|-------|--------------|-----|-----|
| 1 日本橋から | 小野 信一 | 8 たこ踊り | 岡 藤 | 羊子 |
| 2 おはれの朝 | 松野 正 | 9 橋姫 | 藤 谷 | 子 英 |
| 3 玉杯の馬 | 萩野 常 | 10 月と朧めよ | 河 野 | 春 雄 |
| 4 テンバウマ | 芳河 義 | 11 ヘアロハノオホルル | 丘 萩 | 野 秋 |
| 5 暴風雨の薔薇 | 北村 冬 | 12 パラソルの調べ | 野 萩 | 宗 秋 |
| 6 イノエル | 萩野 淑 | 13 ハワイの夜 | 北 村 | 淑 江 |
| 7 侍ニッポン(B) | 芳河 善 | 14 影を慕ひて | 藤 谷 | 冬 雄 |
| | 萩野 宗 | 15 ドレイ | 全 | 員 |
- (舞踊の伴奏はすべてレコードで致します)

音 楽

- | | | | |
|-------------|-------|--------------------|--------|
| 1 侍ニッポン(A) | 合唱隊 | 1 侍ニッポン | 冬 雄 |
| 2 酒かのみたい | 合唱隊 | 2 がまみ山がたのよ | 萩野 恒舟 |
| 3 スタイルソング | | 3 片見ひ | 沖 作馬 |
| 4 丑屋の屋根の下 | | 4 江戸守唄 | 菅本 千代子 |
| 5 ニッポン娘さん | | 5 ゲイキヤパレロ | 萩野 冬雄 |
| 6 赤き翼 | | 6 風の鈴蘭 | 萩野 恒舟 |
| 7 スターホーム | | 7 影を慕ひて | 沖 作馬 |
| 8 有憂草の歌 | | 8 からたちの花 | 菅本 千代子 |
| 9 ハロウほんた | 9 蘭火登 | 萩野 冬雄 | |
| 10 ミスターニッポン | 独 奏 | 11 だるまの遊 | 萩野 宗秋 |
| | | 2 天然の美 | 萩野 宗秋 |
| | | 散 種 | D 合 奏 |
| | | | 萩 操 隊 |
- (休憩間奏をレコードで致します)
 (実際の上演順序は當夜アタリで申上げます)
 レコード係主任 萩野 宗秋
 場内整理主任 萩野 宗秋
 (クラブの管理) 萩野 宗秋

資料 3

資料編

目次

『群馬戦線』	25ページ
『上毛大衆』	29ページ
『宣戦』	69ページ
『全線』	72ページ



創刊號

目次	
統一主義の勝利……………田所輝明	須永好
反動に處する態度……………須永好	
日本労働者群馬聯合……………群馬戦線社	
群馬聯合の真相……………津久井秋作	
農民組合の合同……………大川晋十郎	
群馬解放戦の人々……………X Y Z	
群馬戦線記事……………聞人	
戦線 西瓜畑の裏……………茂呂光吉	
戦線 歌壇……………中村孝助選	
戦線 俳壇……………大川三郎選	
質疑 應答……………大川三郎選	

一四一一五京東替振
行發社線戰馬群
井寺村戶強郡田新

西瓜畑の裏

(農村諷刺劇)

茂呂光吉

人物
彌助 六十四歳、小作人
お八重 その孫娘、両親なき十七歳の娘
吉太郎 農民青年
熊藏 八百屋、三十七歳
巡査 三十一歳
藤左衛門 地主、五十六歳
舞臺
右、畦桑を越して野良道
中央、西瓜畑、西瓜を盗まれた跡
左、桑原つゞき
籬を背負ひて野良道から現れる。畦桑籠を背負ひて野良道から現れる。畦桑

をき分け西瓜畑の有様を見て驚きの感、無言。や、暫くして来た方の道を振り向いて、
彌助 お八重！ 早く来い、何を愚圖愚圖してゐるだ、野呂間尼め！
お八重 何んだい爺やん
彌助 何んだい爺やん
お八重 そんたつて重えだも、(現れる籠を背負つてゐる)あ、草臥れた、さうしたん爺やん
彌助 早くこれを見ろ、すいかをみんな盗れちやつた(淋しげな聲)
お八重 まあ……(魂消た様子、次第に悲しげな顔)……はあ帯が買つて貰ひぬえ！
彌助 さうだこも、主せえ、然う云

ふ心算だら、そてい、だ……すいか畑の中を歩き廻る)
——この時桑原の藤左衛門門をける、桑原ガサガサつミ掃ぐ
彌助 (獨言)誰が盗んだんだべえな いめいめしい、折角あんな大かしたものを、畜生(お八重の方を振り向いて)何ちや泣いてるだ、泣いたつて盗まれたいすが戻つて来るぢやあるめいし、豚馬！何、泣えてるだ……可哀想に(小さい聲)
吉太郎 (現れる)さうしたんだい、彌助やん！ え、お八重ちゃんは何んで泣くんだい、朝つばら……彌助やん、お前が話まんねえ吐言でも云つた、か(彌助の方を向いて)
彌助 何が、そんな事あるもんが、お八重の尼め、娘になつたてな、廣い帯がしめてえだ、三尺はもう嫌になつた、ミさ(笑ふ)
お八重 (しきりに泣く)
吉太郎 そらあ、また……さう云ふ譯

だ
彌助 今夜、鎮守様に盆踊りあるだんべえや
吉太郎 うーん
彌助 そいつを見いづくにお八重公帯をめてえちゆうてな、すいかを賣つて帯を買つてやる譯で、すいかを探りに来たミころがこの有様だ、一つ残さずみんな盗れちやつた……吉太郎 ふうん、成程な、何にも残さずに、随分、ひてえ事をしやがつたな
彌助 糞を一つ置いていつたきりだ……俺を馬鹿にこきやあがつて……
吉太郎 (笑ふ)
彌助 吉！、手前えがぬすんだんぢやあるめえな
お八重 (うなづく)
吉太郎 何を……すいかをか、あんまりたら、ぼつこつちや困るで、俺なんか、貧乏はして居ても他人の物なんかをぬすんで生きべえミは思はねえやい(お八重の方を振り向

いて)お八重ちゃんくなよ、なあ、俺がさうにかしてやるからねえ
お八重 (黙つてうなづく)
彌助 俺がさだから貴様が、ぬすんだんだべえちゆうた、そだなくつて貴様になんかなる管はねえやい
吉太郎 や助やん！ 馬鹿も休み、休み云つてくれや……俺あ、駐在所へ行つて巡査さんに話して、ぬす人を見つけて貰おあげえなんだい
彌助 ふうん、然うか、そんなや濟まねがさうしてくれやあ
吉太郎 あ、(お八重の方を振り向いて)ちやあねえ、お八重ちゃん、俺が行つて、巡査さんを頼んで来るから
お八重 (うなづく)
吉太郎 行つてくるよ(出かける)
彌助 (暫くして)吉が巡査さんと呼ばれてぬす人を見つけてくるらうから心配するなよ
お八重 あ、本當にぬす人を見つけて

てくるんだんべか
彌助 見つけてくるらうミさあよ、巡査さんは豪いもんだぞ、ぬす人を捕めるんが商賣だものよ、腰の鉈豆煙管をこつて一吹する)
お八重 (嬉しうに微笑む)
彌助 (盛に煙草を吹かす)もう吉の野郎も来さうなものだ(伸び上つて見る)まだ来さうも無えな、もう一吹か
お八重 お爺やん、吉つあなが、来たよ
彌助 吉(ふり返りながら)吉、旦那は来てくるか
吉太郎 うん、今直ぐ来てくるつ、後から自轉車でくるだんべえや
彌助 もう、始めがやつた
吉太郎 何、まだ、あらあ習えだ
巡査 (自轉車で来る)、自轉車を道に置いて、すいか畑に入る)、こ、か一同 御苦勞でございます。

衛門の野郎だよ
 巡 査(吉太郎の方を向いて恐しい目付きて)「黙れ! 馬鹿! いくらなんでも、地主も、あらう者が、ぬすみなぞ致すか、まして小作人のもの」

彌助 へい、く、然うてがすこも吉太郎 何? ぬす人は藤左衛門だ、あの慾深な、強突張りだ、足跡が巡 査 何を話らんこを抜かす? (サーベルの音をガチャンこさせ)

熊 蔵 然うかもしんねな、藤左衛門様、今俺の所へ、いかを車一臺持つて来て買つてくろてんだが、俺は彌助さんのを今日は買ふ約束したから駄目だ云つたら、馬鹿野郎なんて俺のこ云つて行つたが然う云はれて見れば……

巡 査 そんなこがあるか、地主ももあるもの、藤左衛門吉太郎 然うかい、まさん、藤左衛門

の野郎は、すいかは一本も作らねえ筈だが、いよ、決まつた
 巡 査 詰らんこを云ふまゝにならんぞ(まだ、サーベルの音をガツチンさせる)ではもう一度調べて見る、すいか畑の中を歩き廻る、おい皆、こちら来て見ろ? こ、へ葉があるから、すべてこの葉に依つて藤左衛門様だか、そで無いが判明するぢやらう、いか、みんな珍物を喰つて居るか、(藤左衛門に分析してみる)見ろ? これは、茄子だ、これは、玉蜀黍だ、(藤左衛門の糞だ、これを見て中流以下の者だ、いふ事これが判るだらう、さうだ君?)

吉太郎 地主様は金を残してえへて生きてるだ、玉蜀黍だ、(藤左衛門の喰へて居るだ、) 藤左衛門の喰へて居るだ、(藤左衛門の喰へて居るだ、) 藤左衛門の喰へて居るだ、(藤左衛門の喰へて居るだ、)

熊 蔵 何、へぼ理屈をこねるに據けて、さうだ、旦那? これになんか書いてあると思ふね、これてぬす人が藤左衛門だ、いふこが解る、通告書

拜啓 夏の候貴下益々御繁榮の段慶賀の至りに存せず候、降つて小生いよ、貧窮の極に陥落し餓える日も

遠からず候間、御喜び被下度候、依つて貴下より拜借仕り候畑一段三畝、先日内容証明郵便にて、返還要求有之候へども、立派な桑原に相成候今日に於ては應に難く候間此段及通告候也
 昭和 年 月 日 根岸三々郎

並木藤左衛門殿
 え、これを見たつて、ぬす人さ、この主が藤左衛門のこを突く張だつて事が、お解になつたてごさますね

巡 査 そんな隊馬なこは、(頭を赤らめて怒り氣味つ、立上り)いまに見ろ、(自轉車の方へ行) 逃げやうに去る
 吉太郎 喰ふためだから、致方ないさ彌助 喰ふためだから、致方ないさ彌助 喰ふためだから、致方ないさ

お八重 俺あ、生きるが詰まらん吉太郎 俺あ、生きるが詰まらん吉太郎 俺あ、生きるが詰まらん吉太郎 俺あ、生きるが詰まらん

新短歌

生活雑唱

原 啓 二 郎

働き疲れた。
 俺の歸りに、ゴヒサギは
 何を思ふて、鳴くか星空。
 全身の
 疲れを洗ふ、雨ならい。
 皮膚が白ちやけ、
 骨が、くちよこ。

祭日だ。日曜だ。おぼんだ。等々。
 やすめる人等に、何 愚痴がある。

秋の生活

高橋 徳 次 郎

悲しい思出の、一つを秘めて、
 今日の日、涙を流して。

十五夜花が、ほつちりこ
 さびた秋日の、花壇をかざる
 青春の末期を思はせるか、十五夜花に
 私雨の日だ、さびた風情よ。
 居所寢に、するく、又時が過ぎて、
 悔いては見るか、疲れきつてる俺である
 生活に疲れきつて、酒のんで居る
 父の顔が、不平を云はせない。
 冷雨降る日も桑摘んだ、蠶は今死んで行く
 報いられる日のいつ来るこが。

口語歌

金子 翠 雨

◎火の様な真赤な秋の陽に濡れた
 稲刈る男の顔色湧く力!
 ◎秋の日の草に光を投げ出した
 父子は黙し互に稲刈りつづけた
 さうしても働かなきや食へぬ身も
 知らずに通るか道の紳士よ
 ◎鈴虫よ、ちぎれる程に働いた一日の
 疲れ足踏る足つぼい路

戦 俳 壇

歩み來た其の砂濱の足跡の
 まがりくねりをふりかへり見た。大洗の海岸にて)
 真直につめて歩つた足跡が左にまがり
 右に折れても
 ◎さうしても摘まねばならぬ晩秋の
 雨がつめたく降る桑原に來た
 びつしよりさしめつたまんま桑摘んだ
 氣なしげに降る雨眼もなく
 ◎貧しさをしみつゝ知つた此の日頃
 野良着のまんま町に出て來た(ある日)

大川 帆三 穂選
 新田 小澤 南華
 梅雨寒ふ障子の紙たるみけり
 床下のビールの瓶は石油かな
 指先やビールのカップ冷やかに
 雷落ちし杉燃えてる人もなし
 外風呂や遠町灯る夏の月
 晝顔や陽の石にはつた翅とする
 桐生 鈴木、健一

金魚ねらふ猫の尾叩く團扇哉
 外風呂に灯釣りけりあやめ咲く
 忘れて庭の人影の涼し
 桑摘みの唄きや野鳥の小屋にゐて
 讀み更けてふ三時計見るや遠蛙
 泡消えしカッパのビール見
 窓の見る川舟の灯やビール酌む
 テニス終るビール掲げ來し芝生哉
 桑畑を抜けて麥畑や揚雲雀
 工場よりの唄聲それも秋の夕
 桐の葉の大揺れに雨蛙鳴く
 街の灯を遠くはなれて涼みけり
 月光に涼しはなれ水車
 よし切や曉近き水ぬり
 七夕の竹をゆする弟かな
 ビールの酌びや露臺を打撃雨過ぐ
 サクラビールの提灯揺らぐ露臺哉
 はねし泥顔に其のま、田植人
 肥地に地に足らじ 蘭 安値
 ビールのカッパ卓置荷語り次ぐ
 藤椅子に凭り、ビールの酔醒ます
 新田 大島不倒翁
 同 田部井紅柳
 同 吉岡 一峯
 同 選 一者

『群馬戦線』昭和三年十二月号掲載文芸欄

群馬戦線

大日 勞 黨 主義の實現 藤生 久
 小作 輕 減 運動の社會的 妥 當 性 石 井 繁 九

社 會 小 澤 一 郎 大 川 三 郎
 時 須 藤 彌 大 川 三 郎
 評 須 永 輝 小 澤 仙 五 郎

戰 線 記 事……… 記 者
 群 馬 解 放 戰 の 人 々……… X Y Z
 小 説 野 良 に 咲 く 花……… 茂 呂 光 吉
 戰 線 歌 壇・俳 壇
 驅 逐 艦・讚 聲 叱 聲

第一卷 第二十一號
 終刊号

十 錢 定 價

振 替 東 京 五 一 四 一
 新 田 郡 強 戶 村 寺 井 八 三 八 行 發 社 線 戰 馬 群

K315
 091
 (1-2)

戦線詩壇

不作だ

木暮正一

今年こそは、力をこめて作つた、稲が失敗した、嘆くな、仲間、恨むな仲間、俺らは手に手を盡した肥料も、たんご、くれた水廻りもよくしたんだ、だのに米は、不作だ、蒼くなる程、考へこむなよなあ、仲間!!、この俺らの苦勞も知らねえ、遊んでる奴等が笑つてやがる、俺らのXXの要求を、はたき突ける!!、反四俵半だ、不作だ、

前進せよ

小松文吾

眞直ぐに、ひき線に、敵に向つて突進せよ!、敵軍に踏み込んでくたばらんが、若き騎士の本望だ、赤い花だ、咲いて散らう!!、同志、敵軍めがけて突進せよ、さあ前進だ!

友よ!奮ひ起て

菊池盛男

朝だ! 友よ、起きろ!!、覺めよ同志、夜明けだ。夜は終えた、耳をすませ!、そして聞け、ほれ!.....あの、貧しい小鳥のやうな少女達も、男も女も、妻も夫も、

戦線俳壇

大川帆三樓選

子がなくや柳吹いて夕餉遅れたる、勢多 登坂城河、落ち葉うつまいて流る、河や魚はなる、山田 石山虎眼子、指先のもさらぬ朝や糸凍る、桐生 岩井田貧女、無燈灯をさがめられけり、辻の月、前橋 櫻井園北、寒月や子を貢ふて米借りに来る、邑樂 山田てる女、留守居して柿もらひけり日曜日、新田 (少女)大川まさの、秋の水岩に砕けて流れ行く、北甘樂 富岡一水、やる瀬なき生活子供よ風邪引くな、新田 しづが女、残りしはひ、戦ぞ年のくれ、新田 小林錦糸

突張つて腰のす夕べ桑落葉

前橋 大内静枝

北風に砂塵をあげて肥汲みぬ

宮澤元一郎

書出しや肥代地代醬油代

新田 小林喜月

秋終えて残りしものや葉こ練

佐藤 勲

野分すき公園に來て、尾行まく

同 選者 吟

細い腰から軀まで血を吸はぶこする、無産階級運動と俳句はたいぶ縁が遠い様に考へてゐるものもある様だが其れは間違つた考へ方である。俳句は遊戯ではない、立派な國有詩である、短詩である、だから虚偽や理窟等は許しません、ごまかすも生活の表現、個性の發揮等が必要條件であり此の條件を關いたら詩的價値を失ふものであると斷言したのであります。今月は殊に嚴選して其の代表的の句を選抜いたしましたので發坂、岩井田しづが女の諸氏の俳句を推薦致します、それから某讀者から「俳句はやかなやけりが惡い」と云ひますが本當ですか?「ご尋ねがありましたら俳句作法第何條に依つて、やかなやけり、は許さんと言ふ様な事は絶対にありません、然し普通の場合何々や何々かな若しくはけりご結ぶ三十七音一詩に纏まるべきもの、詩體が二つになるからであります

習作

友田寛水

松嶺を聞きつ旅寝や天の川、刈りたての頭痒さや天の川、稻妻や望み人多き二才駒、もらひ湯に行くや糸瓜の棚抜けて、花合歌に水の暗さや水馬、夏菊や壁垂れ居る洗ひ馬、競泳の落伍者舟に上りけり、露月翁追悼、みちのくの暗き山河や秋の風、霧の山越えし人馬や貢米、盗れ易き柿の澁さを憎みけり、大序より打入までや菊人形、擬す瀧に菊人形の袖濡れつ、椀摺の目盛り直しつ菊の宿、背き合ひ大根曳き居る夫婦哉

文藝存在の價値

S Y

我々の社會乃至生活云へば大部分が不自由であり、過

す、又詩體が二つに成つて悪い云ふ事もないのでありますから左様御承知願ひます、唯やかなやけり云ふ様な六ヶ敷い作はなか、出来ません、芭蕉翁の俳句の中にも「夕顔や秋はいろ」の字に御注意願ひたいのであります、

■昨年は原案執行、今年も原案執行、

十九對十七で接戦月餘に及んだ縣會座事馬縣會も原案鶏呑み云ふ好成績?五日いよ、幕を開き議員連はそれ、議費を懐に、おがは「故郷へ歸つて行つた。今年、の縣會で、なんなんものたりなかつたのは例の坊ちゃん、細桃御大の居なかつたのである。所謂キヤスチングポイントを握つて昨年の縣會を我もの顔に振るまつた氏も、本年は上州の空つ風を除所に南米ブラジルだかロンドンで大風呂敷に忙しいか、本年の縣會座では誰にも相手にされなかつたであらうに、彼も亦先見の明あり云ふべし。昨年は原案執行、今年も原案執行、何んか異様だが實際は三つちにしては原案を修正しないでそのまゝ、通すたださうだ、而も何れも政民議を削つた結果である、而して開會のあごは知事部長参事員を迎へて、臨江閣で吳越同舟、酒を女を相手にドンチキ融和會があり、知事は其の御禮に關西旅行をさせてやる.....ドコイさうじやない知事が縣民の金で議員三十六を只で關西見物させるんだ、縣民たるもの一言なかるべからずだ。

誤であり、矛盾であり、不徹底である。そしてその日々の生活は勞苦や、苦惱や、煩悶や、悲哀である云へやう。然し人間の本能云ふものはおさへ難いもので丁度蒸氣のやうなものだ、熱すれば熱する程膨脹する、ついには破裂するまで力を持つてゐる。

今の社會を見るに人間の本能が蒸氣で、熱が矛盾してゐる社會のすべての現象だ。社會が人間の生活を脅威する、鐵瓶の中で熱せられる本能の鬱憤である蒸氣は、ドンナ小さな口でも見つけて蒸發する、だが、すべての口をふさがれば爆發するまでになるのだ、ドンナ小さな口でも見つけて蒸發するその逃避所、それが藝術の世界である。悲しむは語るこゝ、現すこゝによつて和ぐこゝがあつたが、これにも一理ある。我々の憧憬してゐる眞、善、美の世界に現在の社會はあまり皮肉に懸隔があり過ぎる、かう考へて來る。藝術は藝術の爲め存在してはならない云ふことが判つてくる。やつぱり人生の爲めの藝術なのである。またある人は、幸福への道行きは我々の認識から發足する、そして藝術はこの認識に導びて科學に劣らない力を持つてゐる、云ふ。我々は藝術に陶醉してはいけぬ。文藝は藝術の中で最も大きな位置をしめてゐる。文藝から享ける愉快さ、文藝の持つ使命をハッキリ知る必要があると思ふ。

「忠やん、おきんは嫌えかい？」
そして彼の顔をじつと見つめた。

「嫌えちやねえけ……」
彼は不在なおきんに對する自分勝手な空想で胸糞を悪くしながらも、おふくろの口からそんな風に相談を持ちかけられる事には、決して悪い氣持はしなかつた。悪い氣持さうろではない、何となくこぼれやうな氣さへするのだつた。

「そうだらうなあ。」「おふくろは、彼の返事を聞いて心得顔に、
「おきんも」……言葉は切つて、
「何も俺あ面さ向つてあれに聞いて見た譯ぢやねえけ、きつこ胸ん中ぢや、忠やんを憎かあ思つてゐねえだんべえ……」……そこで彼女は、急に氣が付いたやうに傍のたあ坊の方を振り返つて見た。

「が、たあ坊は、そばの煎餅布團を背中にかけて、いつの間にか、口を開けて寝込んでゐる。そこで彼女は、安心して語をついだ。
「きつこ、おきんもおめえが好きなんだよ。」「おふくろは眞面目に「きつこ」……いふ言葉に力を入れて言つた。
おふくろの眞面目な話合ひに面さ向ふ、彼は、何となく、やうな面羞ゆさを覺えた。が、一方考へる、お

うな眞白いシヨールに腰を据えながら聲を掛けた。
「忠やんかい？」
「そういつて立止つて暗の中に彼を合せたが、何故かかの女は、いそ／＼その儘靡れちがつてしまつた。そして、益々突立つたかれの背後から、
「明日の晩遊びにおいてよ。」「陽氣な聲で言つて、かの女はすた／＼行つてしまつた。

かれは、氣拔けのしたやうに、自分の家の方へ歩き出しながら、最前のおきんのおふくろの言葉を噛み返して見てせめてもの心遣りにした。こ、かれは、田圃を距て、一町許り先のところを、同じ街道から、地主の木部の家の森の方の途へ曲つて急いで行く人影を、微かな星影で認めた。ちえッ、畜生！あいつにちげえねえ。木部の息子にちげえねえ。畜生！おきんめ。
かれは、腹立たしさに、道端にかツミ唾を吐いた。

その翌日。隣り合つた畑で、忠作は大根引きを、おきんは菜を撮んでゐた。
鈍い冬陽が、二人の背中に降りそ、いてゐる。
仕事の仕始めから、忠作はまだおきんに「こも口をきかなかつた。いま／＼しいから一んちだまつて口をきかずらゐてやらうか」と思ふ。又一面、思ひきつて怒鳴りつけ

きん奴、今時分町で何してやがらんだらう？ 嫌な空想が邪魔をして、氣持が暗々しくなかつた。

「俺もよく考へてんべえよ。」「素氣なく言つて、暗い顔をして口を喋らな。

「そつだなあ。話が初まれば、何もそう急にや當らねえから、おめえもよく考へておいてくんねえよ。」
おふくろは、一先つ安心した様子を再び針の手を動かした始めた。
「暫くの間沈黙が激んだ。さうも嫌な空想が消えない。消えないばかりでなく、反つて益々空想が空想でなく實際の事やうに思はれ出して来る。
忠作は、その場に居た、まねなくなつた。
「又来るよ。お邪魔がなした。」
ぶつかり棒にさう言つて彼は立ち上つた。

2.
夜空には、冷めたい星屑が瞬いてゐた。
桑畑に面した道端で小便をして、ぶる／＼身震ひをして歩き出そうとする、忠作は、遠く町の方へ通ずる街道を急ぎ足に歸つて来た人影にぶつかつた。
おきんちゃんぢやねえか？
彼は、彼女の肩にかけてゐるついで見た事のない暖かそ

てやらうかと思ふ。更に又、昨夜一人で町へ行つたおきんの行動を、委細残らず聞き糾してやりたくもある。それでは、さつから一時間の餘も、わざ／＼仕事の手を鈍らせてながら考へてゐるのである。併し彼は又、おきんの方から進んで何か言ひ出しそうなものださうな期待も胸の裡に持つてゐた。それを、言はないさうな、おきんめ、きつこゆふべ、何かやましい事をしてやがるな。畜生め。俺に對して顔向けのならねえ事をしてやがるな。よし俺あもう一口だつて口なんぞきいてやらしねえぞ。

併し、よく／＼自分の本當の氣持を考へ直して見る、彼は、矢張おきんの口から昨夜の彼女の行動を見る聞かして欲しいのだつた。が、かを一時間の餘もだまりこつてお互に仕事をしする、話をするにもきつつかのつけやうがない。さうも困つたものだ。
で、やうやく彼は、い、事を想ひ出した。ゆうべのおふくろの話だ。そこで彼は思ひ切つて、眼をつぶるやうな思ひて口を切つた。
「なあ、おきんちゃん。」
そこで彼は一息唾を呑みこんだ。こころが、おきんは、案外氣輕に返事をした。
「なんだい、忠やん？ 疲れるなあ。」
氣輕な彼女の返事に、彼は氣勢をくちかれると同時に、

すつかり氣が變になつてしまつた。が、まだ少しびくびくしながら、引き抜いた大根の大きいやつを片手に下げて、畑を横切つておきんの方へ近付いて行つた。
「おめえ、い、襟巻買つたげだなあ。」
「かれは、顔にだけは努めて笑を泛べて言つた。
「あ、あれはねえ、昨夜木部さんさうの飲二さんに買つてもらつたんだよ。」
かの女も彼の方へ近付いて來ながら、飽くまで氣輕に、顔には微笑さへ泛べて答へた。
思ひ掛けなくすつぱり拘泥はりなくかの女が言つてしまつたので、かれは、反つてあつて取られてばかみした氣持だつた。それに又、かれには、勢切つて正面からかの女に突掛つて行く勇氣もなかつた。
「それで何かい、おめえ、昨夜、飲二さんと一緒に町へ行つたんだな。」
併しかれは、胸の裡では、十分な嫉妬と憎惡を感じてゐた。
「あ、そつだよ。それで一緒に活動見べえつて言ふから、俺あ遅くなるからいやだつて斷つたんだよ。」
「ほんこか？」
「ほんこさ。それで、襟巻買つてやるべえつて言ふから、俺あ初めは斷るべえかと思つたけ、さうせ要るもんだか

つたり氣が變になつてしまつた。が、まだ少しびくびくしながら、引き抜いた大根の大きいやつを片手に下げて、畑を横切つておきんの方へ近付いて行つた。

「おめえ、い、襟巻買つたげだなあ。」
「かれは、顔にだけは努めて笑を泛べて言つた。
「あ、あれはねえ、昨夜木部さんさうの飲二さんに買つてもらつたんだよ。」
かの女も彼の方へ近付いて來ながら、飽くまで氣輕に、顔には微笑さへ泛べて答へた。

思ひ掛けなくすつぱり拘泥はりなくかの女が言つてしまつたので、かれは、反つてあつて取られてばかみした氣持だつた。それに又、かれには、勢切つて正面からかの女に突掛つて行く勇氣もなかつた。
「それで何かい、おめえ、昨夜、飲二さんと一緒に町へ行つたんだな。」
併しかれは、胸の裡では、十分な嫉妬と憎惡を感じてゐた。
「あ、そつだよ。それで一緒に活動見べえつて言ふから、俺あ遅くなるからいやだつて斷つたんだよ。」
「ほんこか？」
「ほんこさ。それで、襟巻買つてやるべえつて言ふから、俺あ初めは斷るべえかと思つたけ、さうせ要るもんだか

「あ、めえの語だからなあ、だからつて、そんな位えの事だまされて、俺の體に指一本觸らせらんぢやねえんだから、忠やん、おめえ、そんな事て氣を悪くするんなさあ意氣地が無さすぎるよ。」
眞剣な顔をして、腰を輝かせながら、能辯に饒舌るかの女の口元を見詰めて、かれは聞き終る、あつてに取られた。
が、次の瞬間、かれは、かの女に對する疑雲がすつかり晴れ切つてしまふ。

「あ、めえの語だからなあ、だからつて、そんな位えの事だまされて、俺の體に指一本觸らせらんぢやねえんだから、忠やん、おめえ、そんな事て氣を悪くするんなさあ意氣地が無さすぎるよ。」
眞剣な顔をして、腰を輝かせながら、能辯に饒舌るかの女の口元を見詰めて、かれは聞き終る、あつてに取られた。
が、次の瞬間、かれは、かの女に對する疑雲がすつかり晴れ切つてしまふ。

大衆 誓文 奇譚

1.
細の夢はぐんぐん伸びる。雲雀は空高く啼つてゐる。遠山は霞が花か。下總佐原の里にも櫻咲く春が來た。
「あ、お八重殿、お八重殿……」
さう泣きながら危い足さりで歩いてゐる若侍、これはまた、春をよそに蒼靄めた顔、何か非常に落膽してゐるらしい。やがて足をこめた一軒の家。
「御免下され。」

「徳だと思つて返事したんさ。そしたら、あの馬鹿息子は店が一番い、のを買つてくれたよ。」
「ほんこか？」……云ひながらも、かれは、かの女の口を衝いて出た「馬鹿息子」……いふ言葉に、すつかり嬉しくなつてしまつて、思はずかの女の方に驚き寄つた。
「いやにうたぐり深えなあ、おめえは。」「か、かの女は朗らかに笑ひ出しながら、
「俺は、おめえに、忠やんに嘘なんかつくもんか。」
「そうか。」

かれの胸の中に固く結ばれた嫉妬や憎惡は、陽の目に逢つた氷のやうに次第に解け出した。併しかれは用心深く、
「おめえ、あの飲二になんぞだまされやすめえなあ？」……念を押した。
「何でだまされるもんか。いくら俺あ女子でもよく知つてゐるわな。小作人の娘は小作人の倅さ仲よくして一緒に精出して働いて行かなくちやなんねえつて事あ。飲二さんは、地主さんさこの阿呆息子ぢやねえか。誰があんなやつにだまされるもんか？、いくら女だつて、その位えの事あ、俺あよつと判つてるよ。だから俺あ、襟巻買つてもらつて、温つたかい着纏おごつてもらつて、さつさ歸つて來てしまつたよ。けき俺あ、そんな事に、ちよつとも負ひ目を感じやしねえ。地主の倅が小作人の娘にその位えの事するな

「そつだ。俺達は小作人なんだ。だから一緒に共同して、助け合つて、俺達の立場をしつかり踏ん答へて——そつだ、俺あおめえさよ／＼になるんだ。」
力強くさう云ひ切る、かれは、片手に持つた大根を肩に引かきついで、だしぬけに元氣よくおきんの家の方へ馳け出した。
おきんは、晴やかな微笑を返は、に漣へながら、しかしあつてに取られて、滑稽なかれの後姿を見送つた。
(一九二八・二・九)

「お、元衛門殿か、毎日御足勢にも……」
さう言ひさして、出迎へた主人はもう涙ぐむ。だが直ぐ氣をこらへたかのやうに淋しく微笑んで、
「よい春でござるのう、だがこの陽氣が病人にはいけないやう、元衛門殿、さうやら娘も臨終らしゆうござる。サ、お止りめされ。」
お八重は南向きの暖い病室に寝てゐた。肺勢に罹つて床についてからもう三月になる。美しかつた娘も病に蝕まれては見る影もなく瘦せさらばへた姿、それを痛々しうに

大 澤 要

「お、元衛門殿か、毎日御足勢にも……」
さう言ひさして、出迎へた主人はもう涙ぐむ。だが直ぐ氣をこらへたかのやうに淋しく微笑んで、
「よい春でござるのう、だがこの陽氣が病人にはいけないやう、元衛門殿、さうやら娘も臨終らしゆうござる。サ、お止りめされ。」
お八重は南向きの暖い病室に寝てゐた。肺勢に罹つて床についてからもう三月になる。美しかつた娘も病に蝕まれては見る影もなく瘦せさらばへた姿、それを痛々しうに

見やつて元衛門は言葉をかけた。

「今日は気分はいかゞでござるや？」

「アイ、でも妾もう駄目ぞ御座います。」

「な、なにを氣の弱いことを！ 先日醫者の小酒井不木殿も言はれた通り、この病は氣がらじや。病に負けないで病に勝たうとする心掛け一つで直ります。先生の言はる、病病病病はそのこと。しかるにお八重殿は二言目には、駄目じや、死ぬるを仰言るは、つまり病に負けたがつてゐるやうなもの、死ぬるそなたはよかりやうが、残される元衛門お恨み申すぞ。」

お八重はハラ／＼涙を落し、

「いかば貴方様に恨まれても致し方御座いませぬ。妾さへこんな死病にまひつけれんなら、此春は待ちに待つた

めをこの式が上げられる筈でしたに……元衛門様、貴方には長いこゝ苦勞ばかりかけましたいなア。」

お八重はヂツ／＼戀人の顔を見詰めた。其眼は熱く異様に

かゞやく。

「でも妾、此の頃死ぬのが少しも悲しくござりませぬ。申しても貴方様を慕ふ妾の心に少しの變りも御座りませぬ

何だが、妾、死んでもすぐ生れ變つて來られるやうな氣が致すのでござります。決して病火のうはこなぞを聞き下

さいませぬ。ハツキリさう云ふ氣がいたすのでござります。

「風呂浴びてのんびりするこ、もう今宵は暗くて見分け

もつかないが、明日の朝になつたら此處らの景色はみんなにかよひこゝであらう、なご、誰しも泌々旅の氣分を味ふ

ものである。ところが侍の胸はあやしく亂れて、動靜が高まつてゐる……似も似たる女中の横顔。

やがて物靜かに廊下の軋む音。スツ／＼障子が明いて現

れた女、侍の顔を眞面に見た刹那サツ／＼顔色を變へて持つ

てゐた臆さへこぼり落してしまつた。

「アレ、お暮しや元衛門様！ 貴方のお越しを今まで待つて居りましたぞへ。妾は下總佐原のお八重でございます。」

驚いてハツ／＼飛びのく元衛門。氣を失つてハツ／＼倒れる女中お咲や。

急をきいて馳つけた亭主や番頭の介抱て女はやがて氣

がついた。だが、何故顔色を變へたのか、何言つて卒倒

したのか、サツ／＼女は記憶してゐなかつた。

「コレ、お咲、お咲坊や。氣がついたか？ 氣がついて、く

れてよかつたよ。お前は大人しくてよく働いたが、こんな顛倒持たアちつとも……ハア……知らなかつ

たよ。」

「妾が生れ變つて参りましたら、屹度貴方の妻にして下さ

れ。屹度妻にして下さるこ、も、元衛門様、せ、誓文を書

いて、お、佛壇に供へてをいて下さりませ。これがわたし

の最後……最後のお願いでござります……イ……ませぬ。」

「コレ、お八重殿！ お、臨終でござるぞ！ お八重殿！ お

八重殿！」

ガバ／＼りする元衛門。

縁側の障子にツイ／＼鳥影がさして、ホロ／＼と散る櫻。

實も結ばずに散るが十八のおこめ花、お八重は遂に息を引

きこつたのである。

二、

釣瓶落しの秋の日は、暮れるに早い。上州澁川の宿を出

た中年の武士が、さほ急ぐ旅でもないさみえて、谿川を

眺め、紅葉を仰ぎ、やがて伊香保についた頃はもう暗かつ

た。山の端をくぐる空は越後の荒海を映してほの白い。だ

が山間の温宿はドツ／＼夕闇にござされて此處彼處に瞬く

燈火が一入なつかしかつた。

「亭主、ゆるせよ。」

「入らつしやいませ、暗くなつてお疲れでござりませう。

「ウム、ちと遠方から参つた。音に名高い伊香保。拙者は

じめてではあるが亭主聞きしに勝るよい眺めぢやうの。」

詩

工場の煙

鳥島健三郎

あの天空——

赤い煙突、ばき出される煙よ、

眞黒な煙よ、

慌しく消えてゆく煙よ

工場は愛戀だ

モーターの響、ベルトの恐音

高速度廻轉——青白い顔、

なまぬるい變態心理の幻想、

勞働の小鳥は、おびやかされてゐる、

工場！ 狂燥だ

お、眞黒な煙よ

このは、たきも出さない小鳥は

さんなにか自由の幻影を夢見てゐるか

赤い煙突の煙よ、

この工場の小鳥をのせて行つてくれ、

あの自由の天空へ

そしてその天地へ飛ばしてくれ、

歌はしてくれ。

自然に自由、

それは疲れた勞働の小鳥を

「喜しき幸福」にしてくれるのだ。

あの天空

そして、赤い煙突、眞黒な煙よ、

慌しく消えてゆく煙よ。

(三、一〇、一九作)

奴等の夢を破る

菊池盛男

闘ひは追つた

永い忍従に耐えて來た

我等の懺怒が爆發する

彼等の夢を破るんだ

見よ友よ

東の空は白んで來た

にぎれ手三手を

しつかりにぎれ

高らかな我等の歌で

彼等の夢を破れ。

だが、おまへよ

このさん底の俺れが

さん底の多くの友三手ををりあつて

つまづきころびしながらも

正義の旗を振りかざしつ、

惡魔の世界をめがけて突進し

そして彼等を征服した時

その時は、貧乏神よ

俺れ達よ

おまへよ

永遠に別れよう。

麥の芽

鳥 唐樹

ひろい田ん圃に

緑の線ができたぞ

一九二九年……

農奴たちは太陽を背に浴び

新らしい土を切り立て、ゆく

視るよ

幾條ものこの緑線を

青い山派に通つてゐる。
お、春が
明日のうたを唄つてゆくぞ
みんなよ
白雲をみてロシヤを泣くのか
太陽は緑線に微笑むてゐるぞ

右さ左り

立見生

俺の右トナリでは
子供が母をマ、トミ云ふ
親は得意でハイミ云ふ
左のトナリでは
子供がマ、トミ云へば
親は食へたばかりでこの餓鬼はミ、ミ
えらい權様だ

右トナリの御主人は
朝の九時頃すばらしい洋服で縣廳に出
掛る

午後四時頃子供や、ワイフに出迎へを
うける
左トナリの大將は
朝の五時頃祝切絆犬一枚で水道工事に
働に行く
夜八時過ぎ凹んだ眼をして家の前で溜
息をついてゐる

右トナリの奥様は
御主人を送り出して、オシロイ付けて
ケツなで、
一日中オルガンを引いてゐる
左トナリのカミサンは
朝から晩まで登り鉢巻で
袋はりに頭から湯氣を立てゐる。

夢

岡部宇一郎

男 戀をしてない
女 戀をしてゐる
女 わたし ゆうべ夢をみたの
男 さんな夢

女 あのね
男 え、
女 ミても面白い夢なの
男 さうした夢
女 あの わたし言へないわ
男 言つてごらんよ
女 いや
男 い、ちやあないか
女 だつて笑ふんでせう
男 笑わないよ
女 そう
男 うん
女 ぢやあ 言つてみませうか
男 早く言ひなよ
女 あの ね
男 なに
女 あなたがね
男 さうした
女 わたしミ
男 あなたミ
女 川へ行つた夢なの
男 なんだ

一九二八、一〇

放浪生活詩

横堀真太郎

赤・緑・黄
さうした色彩のゴンドラを水の都ベニ
スに浮べて
椰子の葉蔭に惹ふゆめを見ればやこ
今宵紫色の感覺を抱いて赤い心の林に
入れば
明るい臉の春の女が私の心を悲しませ
る。
熱帯の月下のトレモロ
西比利亚荒野のさすらひ女を
オペラ劇場のコーラスの中に見出した
やうに
私は私自身の心をわからなくしてしま
つた。
背い南洋の海原に鷗を飛ばせ
椰子の生えた珊瑚島に情熱の土人を立
だしめ
純日のヨットで海上を滑るのでなければ
もう私は三月の温室へは入れない

生活雑片

小林文雨爾

なにかしら
追つかげられる様な氣で
過してしまつた
俺れの一年。
らんぶのもこ
ズボンのツギをする妻の
横顔が寒い
外は風。
この冬は
古いズボンで通さうか
縫つてゐる妻に
はかつて笑つた。
ミルクの瓶
酒德利
妻は俺れミ そして
淋しい笑ひぢあないか。
生きる辛さ
生きる喜び

チユトリツブミヒヤシンスミシクラメ
ンの美しい花は
私には用はなくなつてしまつた
大ビラミットミスフィンクスが
淡い月の光を浴びて立ちつくしてゐる
様な心持で
私は灰色の西洋紙上に
未來へのカタログをいぢり記さなけ
ればならない。

失業して

椎之木源太郎

昨日も、そして今日も……
俺はかけめぐつた、それなのに
師走の風は遠慮なしだ
赤錢まぢりもやつと得て
胃袋だつて満ちやしない
今宵のパンは何から求める
盗めば泥棒だ
すばらしいモダンガール
毛皮で襟を埋めたセントルマン
見てくれ!

歌

山をくだり

シドノ マイケル

山をくだり 里にいでむ
里 未だ秋にして 樹々美しう
道に 畑に 青草はあらむ
我輩やぶれたれば
先づ糧をあがなひ
病犬のため 薬も買はむ
壺、砂糖 火薬 酒も袋にみだし
久しぶり郵便局に
なつかしき 便りもきかむ
山をくだり、あ、この雪止まば
明日こそは 里にいでむ

新生活に起ちて

金子 角司

みんな帳消した
吾が兒の顔よ。
金のない話ばかりだ
遠慮した
怨嗟の聲だ
笑ひぢあないよ。
不平なしに 笑つてみたい
不平なしに ものが言ひたい
一寸でもい、よ
逢ひたれさか、わりなき人の如き君は
つれなく行き過ぎにけり
まち／＼て君に逢ふ日は來たれさも庭
の椿は開かざりけり
晴れやかに語らうこゝはひそやかに歎
かうこゝにまさるかなしみ
かにかくに荒れる人の心かなめぐまれ
ざればせんなきものか
いさましくまたに叫ぶ人々の蕙まる
、日をせちに希ふも

歌

田澤きわ子

最底に病みて
小林あき子
は、そはのいみじきこぼおきなく
聞きてゐるなり白髪を見つ、
兄ミ吾れ長病みをればうから、は着る
もの着ずて働くかあわれ
わが死なば家の生活のいさ、かは樂に
ならむを死ぬに死なれず
血のにじむ思ひに買ひしこの印おし頂
きてわが食うぶるも
わが病ついに癒えずでこの年も木枯す
さぶ頃さなりけり